

No.	メールでの意見
1	<p>私は平成15年台風10号で避難をした平取町民です。あの時の恐怖を顧みて、早急に平取ダムができあがり安心して暮らせる地域づくりを推進して頂きたいと思っております。</p>
2	<p>近年洪水（H15.8）に対応した外水対策や内水対策、シシャモの産卵床等の保全に配慮した河川工事、ダム湖を利用した空間整備等が盛りこまれた河川整備計画について良好な計画と考えております。これらについて早期に効果が発揮出来るよう、平取ダム建設の早期着工を望みます。なお、河川整備計画の目標流量（6,100m<sup>3</sup>/s）は「戦後最大洪水である平成15年8月洪水と同規模の洪水流量が発生しても計画高水位以下で洪水を流下させ・・・」とあり、河川整備基本方針の基本高水（6,600m<sup>3</sup>/s）も「昭和50年8月洪水、平成15年8月洪水等の既往洪水について検討・・・」とあり、どちらも平成15年8月洪水対応だと思われませんが、500m<sup>3</sup>/sの開きは何故なのでしょう。確率規模の丸めの違いなのでしょう。</p>
3	<p>H15年8月の大洪水で沙流川と二級河川厚別川を比べると、厚別川の惨状は目を覆うばかりであります。河川の基本である安全を確保する施設が整備されて、はじめて良好な河川環境が保たれます。原始の状態が良い訳がありません。額平川は平取ダムを必要としているのは明白であります。下流堤防溢水を防ぎ流木被害から免れた二風谷ダムの働きをおもいに、平取ダムが完成して、はじめて流域住民の安心が得られます。</p>
4	<p>「ししゃもの産卵床が昭和40年代をピークに減少している」とあるが、なぜ、ししゃもの産卵床が減少したのかを明記してほしい。また、ししゃもの生育環境を保全するとあるが、個体数維持ではなく、生育環境を改善することにより個体数増を考えなければ、ならないのではないのでしょうか？</p>
5	<p>本日は、河川整備計画の変更に関する説明をしていただき有難うございました。私は、平取本町での説明会での3番日に意見を述べさせていただきましたと申します。説明の中で文書で再度提出との説明がありましたので再度お願いいたします。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 20年計画とのことですが、1年でも1日でも早い完成を望みます。</li> <li>2. 計画変更の中で6100?/秒とありましたが少しでも多い計画にしていきたい。</li> <li>3. 堤防より低い民家の多いことに驚きました。計画完成前に洪水の恐れがあるときは、河川管理者、町、町内会等の連絡網を構築しサイレンを吹鳴する前に事前予告（危険な状態になってきましたこれ以上増水しますと非難勧告を発令します）等情報伝達をしていただきたい。</li> </ol> <p>以上、宜しくお願いいたします。</p>
6	<p>沙流川下流地域の安全を守るために、平取ダムの早期着工を望みます。沙流川の河道掘削は、多少の雨でも河川敷地にあるせせらぎ公園とかサッカー場に水が乗らないこととなるので、維持管理の問題でも早期の実現が望ましいと思います。地域住民の安全を守る為の整備計画の変更なので大いに期待しています。</p>
7	<p>シシャモの産卵が行われる漁業上重要な河川であり、それら生息環境への配慮を明記しているが、今後どのような調査・評価を行い漁業者の理解を得る予定でしょうか。その際の評価指標は、漁業者にとって理解し易いものであることを希望します。</p>

No.	メールでの意見
8	<p>現在、沙流川水系河川整備計画変更案に対する意見募集が行われています。しかし、現状の意見募集のあり方には、以下のような問題があると思われまます。御改善について御検討よろしくお願ひいたします。</p> <p>◎意見募集のありかたについて</p> <p>1. 意見募集期間について  募集期間が12月7日～27日とされているが、これは期間が短すぎる。流域委員会は複数回開催されるものであり、委員会の進行とともに、一般市民についても計画案が浸透し、理解が深まっていくものである。意見募集期間は、少なくとも流域委員会開催期間中とするべきである。</p> <p>2. 意見募集の対象について  北海道開発局室蘭開発建設部による報道発表資料では、意見募集の対象を流域住民に限定するかなような表記がある。また他のWEBページの告知文においても、沙流川に関わりのある人という限定条件が書かれている。しかし、整備計画によって直接に重大な影響を受ける沙流川流域のアイヌ文化は、北海道遺産に指定されており、北海道民共有の財産である。また冬の沙流川に多数飛来する猛禽類のオオワシ、オジロワシは、国の天然記念物に指定されている。かつ、オオワシは一九八八年発効の「日ソ渡り鳥保護条約」の対象種でもある。そして、沙流川は国の管理する一級河川であり、国家予算を費やして整備されている河川であるから、沙流川に関わりがあるのは、少なくとも全ての国民であるといえる。</p> <p>先のような限定条件の表記は、一級河川に関する意見について、募集対象を地域や生活によって限定するかなような印象を国民に与えるため、無意味かつ不適切である。したがって、意見募集の対象は、全ての地球人であると明記するべきである。</p> <p>もちろん河川整備においては、直接の生活者である流域住民の意見が尊重されなければならないことは言うまでもない。しかしスポンサー（国民全体）の意向を無視しての大規模プロジェクトというものも、またありえない。</p> <p>3. 募集した意見の扱いについて  室蘭開発局インターネットホームページでは、集めた意見を「公開する場合がある」とされている。しかし市民的議論の公平性を期するためには、全文を原文のまま公開するのが当然である。</p> <p>また、12月17日、19日に開催された意見聞き取り会でも、「同趣旨の意見について取りまとめ、河川管理者の見解と合わせて公表する予定」とされている。河川管理者による意見のとりまとめには、河川管理者側の恣意的な選択や改変が入るのではないかな、という疑念を払拭できない。</p> <p>聞き取り会での住民意見は、「1人3分以内1発言限り」というきわめて短時間に、口頭の言葉で述べられたものであるから、そのまま掲載すると、かえって内容がわかりにくく場合もある。しかし、極力発言主旨にそった形で、個別に記録、公表するべきである。意見に対して、会場で開発局側が回答を示したのものもあり、そのような議論を理解するためにも、聞き取り会の意見については、全文議事録による公開が望ましい。</p> <p>河川管理者による見解の掲載については問題ない。見解を示すことによって、国民的な理解や議論が、より深まるものと考えられる。しかし、その見解に対しても疑問や反論が生じる場合がある。ところが現状の意見募集日程では、「河川管理者の見解への質問や反論」を行う機会が確保されず、公平な議論とはなり得ない。そういった意味からも、意見募集期間が短すぎるかな、聞き取り会が各地域1度ずつしか開催されないことは、本質的な問題である。</p> <p>収集された意見は、流域委員会の場において各委員に資料として示されるものと思ふが、これについても全文を全文で扱うべきであり、河川管理者は「取りまとめ」を行うべきではない。仮に全文では煩雑であるという判断があるとしても、要旨集と原文の二段構成が必要であろう。</p> <p>4. 募集した意見の反映について  収集した意見がどのように流域委員会の議論に反映されるのか、その道筋を国民に示すことが必要である。単に意見募集しました、公開・配付しました、あとは忘れまました、といった形では、意見募集は単なる手続きでしかなく、計画に対する民意の反映は期待できない。集めた意見を、どのように河川計画に反映させるのか、そのシステムを、あらかじめ国民に示してほしい。</p> <p>沙流川水系流域委員会事務局ならびに各委員の皆様、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。</p>

No.	メールでの意見
8	<p>●本意見書については、ほぼ同内容をインターネット上で公開しております。  <a href="http://mirai00.hp.infoseek.co.jp/nibutani02/2005henkou/">http://mirai00.hp.infoseek.co.jp/nibutani02/2005henkou/</a></p> <p>2005年12月7日に、沙流川水系整備基本計画の変更案が、北海道開発局室蘭開発建設部より示されました。今回の変更案、またその根拠となる河川整備基本指針には、非常に多くの問題があります。これらについて簡単な検証を行い、本計画案への意見書とします。(カラー図表使用)</p> <p><b>【意見書目次】</b></p> <p><b>1. 計画流量の問題</b></p> <p><b>2. 河川計画の問題</b></p> <p>2-1. 沙流川の整備計画の移り変わりと、変更案の問題</p> <p>2-2. 2003 洪水の平取の水位と流量</p> <p>2-3. 養魚の前提の変化</p> <p><b>3. ダム計画の問題</b></p> <p>3-1. 二風谷ダム変更案の問題</p> <p>3-2. 平取ダムの問題</p> <p><b>4. H17 整備計画変更案の問題の総括と提言</b></p> <p>4-1. 2003 年 8 月洪水による被害</p> <p>4-2. 従来の河川整備計画及び今回の変更案の問題</p> <p>4-3. 流域委員会のあり方について</p> <p>4-4. 沙流川の河川整備に関する簡単な提言</p>

No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="422 443 630 470"><b>1. 計画流量の問題</b></p> <p data-bbox="435 512 831 539"><b>(1) 基本高水流量と整備目標流量の検証</b></p> <p data-bbox="422 584 1201 716">河川整備にかかわる、河川整備基本指針や河川整備基本計画では、対象とする洪水の規模について、通常は「〇〇年確率に相当する、〇時間あたり〇〇mmの雨が、〇年〇月洪水の降雨パターンで降る場合に、洪水ピーク流量が〇〇m<sup>3</sup>/sになる」というように記述されます。</p> <p data-bbox="422 725 1201 857">ところが沙流川の今回の変更では、河川整備基本方針の6,600m<sup>3</sup>/s、また河川整備計画の6,100m<sup>3</sup>/s、ともに具体的な根拠が述べられていません。大幅な計画変更に関する具体的な根拠が国民に示されていないのですから、一つの大きな問題です。</p> <p data-bbox="422 866 1201 965">そこで、河川整備基本方針検討小委員会の議事録を調べてみました。こちらの第17回、19回の小委員会で、沙流川の計画変更に関する審議が行われています。</p> <p data-bbox="422 974 1201 1072">当面の河川整備の方向をきめる河川整備基本計画は、流域委員会を開催して有識者や地域住民の意見を聞いて策定することになっていますが、計画の大本となる河川整備基本方針は、国土交通省内部の審議のみで決定できます。</p> <p data-bbox="422 1081 1201 1214">第17回の委員会資料6と7に、基本指針の流量算定に関する資料がありました。整備計画の目標流量である6,100m<sup>3</sup>/sは、H15洪水において、二風谷ダムへの流入量として算定された数字をそのまま採用しています。つまり形式上は「実績値」です(※)。</p> <p data-bbox="442 1258 1201 1319">※この「実績値」として、試算によって得られた数値の一つでしかなく、とくにH15.8洪水の状況では、正確さは期待できません。</p> <p data-bbox="422 1364 1201 1534">また基本方針の基本高水流量6,600m<sup>3</sup>/sは、100年確率の総雨量を300mm/24hとする一方で、これを上回るH15洪水における総雨量である307.4mmを総雨量として採用し、また3つの洪水の降雨パターンについて検討を行った結果、H15.8洪水が最大になるとして、これを採用しています。つまり、H15.8洪水における、実際の降雨データの流域平均値を用いて、雨量から流量への変換の計算を行っ</p>



実際の計算結果である 6,600m<sup>3</sup>/s を、そのまま採用しています。  
これらをまとめたのが次の表です。

	河川整備基本指針 (全体計画)	河川整備計画 (当面の整備計画)
計画ピーク流量	6,600m <sup>3</sup> /s (基本高水流量)	6,100m <sup>3</sup> /s (実績最大流量=目標流量)
根拠となる雨量	307.4mm (100年確率を上回る実績値)	307.4mm(実績雨量)
降雨パターン	H15.8洪水 (ピークが最大となる 降雨波形)	H15.8洪水 (実績洪水)
算出根拠	二風谷ダムの流量データに基づき、平取地点における流量を 貯留関数法で推算	二風谷ダムにおける、実績最大 流入量(推算値)を平取地点の 目標流量とする

(表 1-1) 河川整備基本指針と河川整備計画案の比較

こうして、基本指針では 6,600m<sup>3</sup>/s の基本高水流量、また整備計画案では 6,100m<sup>3</sup>/s という整備目標流量が算定されました。

でも、ちょっと待って下さい。確かに大小二つのピーク流量が算出されていますが、これらのもととなる降雨と洪水のデータは、どちらも平成 15 年 8 月洪水であり「基本的に同一のもの」です。違いは「実績値」であるか、「計算値」であるか、また算出に用いる地点を、a. 二風谷ダムの流量をもって 6km 下流の平取地点の流量とするのか、あるいは、b. ダムで 6,100m<sup>3</sup>/s となる計算式を用いて、6km 下流の平取地点での流量を、雨量から直接に計算したか、というだけでしかありません。

a の場合(整備計画)では、二風谷ダムの流量と平取地点の流量に、実質的な違いがないことが前提です。

b の場合(基本指針)では、二風谷ダムから平取まで流れる間に、支流から 500m<sup>3</sup>/s のピークに関与する流入が生じることになります。基本指針と整備計画の流量の算定には、前提自体に論理矛盾を生じています。

「実際に生じた同一の降雨による同一の洪水」という同じ現象を扱っているにもかかわらず、計算手法の違い、計算誤差の発生、論理矛盾等の問題によっ

て、洪水ピーク流量の計算結果に 500m<sup>3</sup>/s という少なからぬ違いが発生し、その違いをそのまま、「洪水規模の異なる別個の洪水」として扱っているのが、今回の変更案の最大の問題といえるでしょう。

なお、平成 17 年 3 月には、二風谷ダム最大放流量が 5,500m<sup>3</sup>/s の場合には、平取地点におけるピーク流量が 5,200m<sup>3</sup>/s に減少するという試算結果が、北海道開発局から示されています（※）。ダムを介さず、より鋭い 6,100m<sup>3</sup>/s のピークをもつ洪水であれば、ピークの崩れはより大きくなり、平取地点でのピーク流量は低くなるでしょう。仮に同じ比率でピークが低下するならば、二風谷ダムで 6,100m<sup>3</sup>/s の流量の場合、平取地点では 5,800m<sup>3</sup>/s 程度になるはずです。

基本指針、整備計画とともに、計画高水流量の数値は、2005 年 3 月の開発局自身による試算結果とも矛盾を生じています。

※ ピークの鋭い洪水が、自然状態に近い河道を流れると、ピークの鋭さは崩れるものです。ふつうの川を 6km 流すだけで、河川延長にして 8km の二風谷ダムの計画よりも洪水ピークの低減効果が大きいのなら、二風谷ダムは不要でしょう。

実際に生じた同一の降雨・洪水データをそのまま用いた結果、計算方法の違いによって、異なる 2 つのピーク流量が算出され、その大きな方（6,600m<sup>3</sup>/s）を「100 年確率洪水」として基本方針に採用し、小さな方（6,100m<sup>3</sup>/s）を、「実績洪水」として、今回の整備計画に採用しているのです。一方で、治水基準点である平取の水位と流量の換算には、2005 年 3 月に発表された「流下によってピーク流量が低下する」試算値に基づいた換算式を用いています。

もう一度、表にまとめてみましょう。

	A. 二風谷ダム流量	B. 平取地点流量	B-A	計画高水流量
a. 河川整備計画	6,100m <sup>3</sup> /s (ダム流入量実績値)	6,100m <sup>3</sup> /s (A と同値とする)	0m <sup>3</sup> /s	6,100m <sup>3</sup> /s
b. 河川整備基本指針	6,100m <sup>3</sup> /s (ダム流入量実績値)	6,600m <sup>3</sup> /s (貯留関数計算)	500m <sup>3</sup> /s	6,600m <sup>3</sup> /s
c. 開発局レポート (参考)	5,500m <sup>3</sup> /s (ダム放流量実績値)	5,200m <sup>3</sup> /s (河道追跡計算)	-300m <sup>3</sup> /s	--

(表 1-2) 計算根拠ごとの二風谷ダム・平取流量の違い

No.

メールでの意見

8

同一の現象に対して根拠の異なる数値を混在させ、それらを比較してダムの効果を論じるのは、先の洪水直後に開発局が発表した、「二風谷ダムの水位低減効果は 1m」のまやかし発表（※）と、まったく同様のやりくちといえるでしょう。このようなトリックが、ダム計画や河川整備の基礎となる、「河川整備基本指針」、「河川整備基本計画」の変更において行われています。

国の審議会は、こんな簡単なトリックをなぜ放置するのでしょうか？ 「審議会」とは名ばかりで、実は「共犯」なのではないかと疑っています。

こうした数字のごまかしからは、今回の整備基本計画によって、予算がとれるうちに少しでも大規模な河川工事(ダム含め 700 億)を計画し、一気に進めてしまおうという姿勢が見えるようです。

※北海道開発局は、実際に平取で観測された最高水位（標高 28.3m）に対して、実際の水位流量の関係とは大幅に結果が異なる計算式による「ダムの効果 1m」を組み合わせて、「洪水が堤防を超えなかったのは二風谷ダムの効果」として、1 年半にわたり、過大な治水効果の PR を続けていました。現在公表されている、「ダムがなければ 6100 トン、ダムがあったから 5200 トン」という話も、同様のトリックです。この二つの数値は前提条件が異なります。これを開発局の論理として正しく書くと、「ダムの流入量は毎秒 6100 トン、放流量は 5500 トン。この 5500 トンが自然現象でピークが崩れて 5200 トン。ダムがなくても、同様に自然現象でピークが崩れれば 5800(?) トン」と書かねばなりません。このまやかしは、国土交通省の基本指針策定小委員会でも使われていました。

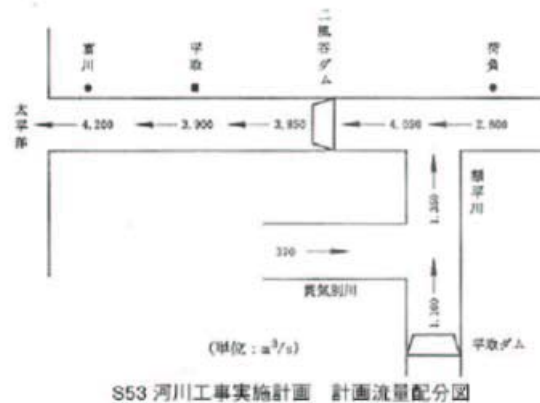
## 2. 河川計画の問題

### 2-1-1. 沙流川の整備計画の移り変わり

#### (1) 従来の治水計画

##### a. 沙流川水系河川工事実施計画

沙流川の治水対策は、1978(S53)の沙流川水系河川工事実施計画の改定によって、「100年確率」洪水の「ピーク流量 5,400m<sup>3</sup>/s」に対応することとされました。5,400m<sup>3</sup>/sの洪水を、二風谷ダム、平取ダム等の建設によって調節を行い、治水基準点の平取のピーク流量を3,900m<sup>3</sup>/sにする計画です。



(図 2-1) 河川工事実施計画による流量配分図

河川各ポイントでの流量、また各ダムの効果を、概略で読み取ることができる。

##### b. 沙流川水系河川整備基本方針

1997年(H9)の河川法改正の後、1999年(H11)に策定された沙流川水系河川整備基本方針によっても、この内容はそのまま踏襲されます。ただしこの基本方針では、平取ダム建設については具体的には触れられませんでした。



## e. 沙流川水系河川整備計画

基本方針を全体の長期計画とし、今後20年間ほどの整備目標として、沙流川水系河川整備計画が、2002年(H14)に策定されます。これは、過去の最大の洪水と同規模である「ピーク流量4,300m<sup>3</sup>/s」(40年確率相当)に対応する河川整備をすることとしました。1999年から2002年まで9回開催された流域委員会では、4,300m<sup>3</sup>/sというピーク流量の設定、また放水路や堤防整備といった複数の河道計画案、またダムや遊水池など洪水の貯留案が示されます。この中から委員会での議論を経て、4,300m<sup>3</sup>/sの洪水を、既設の二風谷ダム、そして平取ダムの建設によって調節を行い、下流河道を3,200m<sup>3</sup>/sに対応できるように、二風谷ダム下流において、部分的な河道の掘削工事を行うものとなりました。



H14 整備計画 計画流量配分図

(図2-2) 新河川法下でのH14河川整備計画による流量配分図  
内容が大幅に簡略化され、ダムの効果等はサッパリわからない。

## (2) 河川整備基本方針の変更

H14 整備計画が策定されてまもなく、2003年8月洪水が発生しました。これを受けて2005年11月に、河川整備基本方針が変更されます。変更された基本方針では、二風谷ダム地点のピーク流入量が6,100m<sup>3</sup>/sのとき、治水基準点の平取のピーク流量が6,600m<sup>3</sup>/sになると試算し、その6,600m<sup>3</sup>/sを、沙流川の

治水計画が長期的に対応しなければならない流量と定めました。

### (3) 河川整備計画の変更(案)

基本方針の変更を受け、整備計画の変更作業が現在進められています。整備計画変更案では、当面に対応しなければならない平取地点でのピーク流量を、2003年8月洪水の二風谷ダム流入量に等しい6,100m<sup>3</sup>/sとしました。この増大された洪水流量への対応方法について、「現行の河川整備計画の基本的な考え方を踏襲する。(二風谷ダムと平取ダムにより最大限洪水調節し、それでも不足する洪水流量を河道で対応する。)」と、変更案の中で、北海道開発局は述べています。



H17 整備計画変更案 計画流量配分図

(図 2-3) 今回の変更案による流量配分図

額平川の流量が 1,600 と記入されたものの、各ダムの効果はサッパリわからない。

★流量根拠の問題については、前章・『計画流量の問題』を御覧下さい。

No.	メールでの意見
8	<p style="text-align: center;"><b>2-1-2. 変更（案）の問題</b></p> <p><b>(1) 現行計画が選択された理由</b></p> <p>開発局が踏襲するとした、二風谷ダム、平取ダムを中心とする「現行の河川整備計画」は、どのような議論を経て決定されてきたのか、当時の流域委員会資料から、少し詳しく見てみましょう。</p> <p>過去の流域委員会では、沙流川の治水対策を A. 流下能力の拡大・確保 と、B. 洪水量の調節 に大分し、各々の手法の組み合わせの中から、さまざまな影響について議論を行ってきました。</p> <p>A. 流下能力の拡大・確保</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 河道掘削案</li> <li>2) 放水路案</li> <li>3) 堤防かさ上げ案</li> <li>4) 堤防引き堤案</li> </ol> <p>A. 洪水量の調節</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 二風谷ダム) 単独案      4,300m<sup>3</sup>/s → 約 3,700m<sup>3</sup>/s</li> <li>2) 二風谷ダム+遊水池案    4,300m<sup>3</sup>/s → 約 3,600m<sup>3</sup>/s</li> <li>3) 二風谷ダム+本流ダム案   4,300m<sup>3</sup>/s → 約 3,300m<sup>3</sup>/s</li> <li>5) 二風谷ダム+平取ダム案   4,300m<sup>3</sup>/s → 約 3,200m<sup>3</sup>/s</li> </ol> <p>A 群と B 群のいくつかの組み合わせの中から、流域委員会の議論を経て、「二風谷ダム+平取ダム+河道掘削 (3,200m<sup>3</sup>/s)」が選択されたとされています。</p> <p>この案が選択された理由について、北海道開発局室蘭開建が作成した第 7 回流域委員会資料『沙流川における治水対策について（案）—沙流川流域委員会の経緯—』では、以下のように記述しています。</p> <p>a. 洪水調節によって、二風谷ダムから下流の洪水による負荷を低減できる。あわせて、額平川下流の貫気別地区の洪水被害の軽減が可能である。</p>

No.	メールでの意見
8	<p>b. 高水敷掘削案に比べ河道の改変規模が小さいため、周辺の河川環境や地域の貴重な水産資源であるシシヤモの自然産卵床への当面の負荷が小さいと考えられる。</p> <p>c. 堤防かさ上げ案や引き堤案を採用した場合、20年～30年後の次期整備計画においては、その移転した建物や施設のさらなる移転が生じる（手戻り）可能性があるが、本案においては今後将来とも現在地での発展が展望される既存の市街地や農地の移転は行わないため、これまで進めてきた町づくりへの影響はない。</p> <p>d. 平取ダム貯水予定地は、町有地などの公有地をのぞき用地処理をほぼ終えているため、移転家屋や農地の大規模な補償はなく、地域へ与える負の影響は少ないものと考えられる。</p> <p>e. 事業費は、堤防かさ上げ案や堤防引き堤案を下回る。</p> <p>f. 河道の改変を抑えることができるため、アイヌ文化伝承の一つであるチブサンケの実施や平取町で計画されている伝統的生活文化空間整備構想において、今後の実施に支障となる恐れは小さい。また、現在の沙流川らしい河川環境の保持にも寄与する。</p> <p>g. 治水対策と合わせて流水の正常な機能の維持として、シシヤモの産卵やサケマスの遡上に必要な流量や既得用水の補給、水質の維持に必要な流量を確保することができる。</p> <p><b>(2) 変更案と過去の議論の関係</b></p> <p>H17 整備計画変更案では、「現行の河川整備計画の基本的な考え方を踏襲する。（二風谷ダムと平取ダムにより最大限洪水調節し、それでも不足する洪水流量を河道で対応する。）とされています。これは先の議論の「結論」のみを踏襲するものであり、「根拠」や「議論の経過」についても十分な配慮が必要です。</p> <p>A 下流の負荷は低減されるのか？</p> <p>今回の変更案では、二風谷ダム下流の計画高水流量が従来計画よりも大きく増やされます（従来 3,200m<sup>3</sup>/s→変更案 4,500m<sup>3</sup>/s）。これは、サーチャージ水位における二風谷ダムの放流量が、それだけ増加されるということです。二風谷</p>



No.	メールでの意見
8	<p>ダムは自然調節式の洪水調節を行いますから、ゲート開度は基本的に一定です。したがって、計画最大放流量が増やされるぶん、ゲート開度が大きくなり、洪水調節が開始される流量も大きくなります。今回の変更案では、中規模な洪水時に、むしろ下流の負荷が増大する場合があります。</p> <p>B. 河道の改変規模は小さいのか？</p> <p>今回の変更案では、二風谷ダム下流のほぼ全域を 4,500m<sup>3</sup>/s 対応で掘削するとしています。従来の議論では、3,700m<sup>3</sup>/s 対応の河道掘削案でさえ、環境影響が大きいとされていました。今変更案はさらに大規模な河道掘削を行うことになり、「部分掘削が前提である従来の議論とは、大きく矛盾することになります。</p> <p>C. 町づくりへの影響は？</p> <p>今回の変更案では、河道掘削にともない、下流門別町富川地区では、二風谷ダム完成後に河川敷地に整備した公園施設、運動施設等の撤去が必要になります。これも、「町づくりへの影響はない」とした従来の議論とは矛盾します。</p> <p>D. 平取ダム予定地の補償について</p> <p>今回の変更案についても、平取ダムの規模は変わりませんから、直接的な金銭補償としては、影響をうけないものと考えられます。ただし、アイヌ文化や埋蔵文化財、自然生態系の保全に関する調査対策費が発生します。</p> <p>E. 事業費は小さいのか？</p> <p>従来の流域委員会の議論では、「二風谷ダム+平取ダム+河道掘削(3,200m<sup>3</sup>/s)」にかかる費用は概ね 350 億円と見積もられてきました。これに対し、堤防かさ上げ案、堤防引き提案は 450 億円とされ、この比較で「事業費が小さい」とされました。しかし今変更案では、平取ダム 500 億円、河道掘削 200 億円の合計 700 億円という見積もりが示され、他のどの案よりも事業費が大きくなっています。とくに平取ダム建設は、従来 80 億円と説明されてきたもので、ダム建設費が以前の 6 倍以上に大きくなっています。</p> <p>※そもそも、ダム建設+河道改修の大規模工事が 350 億円では足りません。過去の議論でさえ、河道掘削には 250 億円程度は必要とされてきました(二風谷ダム+3700m<sup>3</sup>/s 河道掘削案)。平取ダムが 100 億円程度でできるならばこのような見積もりも可能でしょうが、二風</p>

No.	メールでの意見
8	<p>谷ダムに 760 億円かかった後での、そのような話にはまったく現実性がありません。過去の議論でさえも、「ありえないこと」が前提の、無意味な議論だったのかもしれない。</p> <p>F. アイヌ文化への影響は小さいのか？</p> <p>沙流川流域のアイヌ文化は、チブサンケのみではありません。この 3 年間にわたって実施されてきたアイヌ文化・環境保全調査により、平取ダム予定地そのものが、「チノミシリ：神の声を聞く場」であり、他にも水没予定地には幾多の信仰の対象が存在し、アイヌ文化伝承の場としてきわめて重要な地域であることが明らかにされています。これらをダム工事によって破壊ないし水没させた上で「影響は小さい」というならば、「二風谷ダム裁判の違法判決」から、何も学習していないこととなります。仮に何かの代替策を講じるにしても、それは莫大な影響のごく一部を、わずかに低減するに過ぎないでしょう。</p> <p>G. 流水の利用は？</p> <p>今後 20 年にわたって続けられる二風谷ダム下流の全面的な河道掘削工事が、シシヤモやサケ、あるいはワシなどの生息環境に直接的な打撃を与えることは必至です。毎年川底を掘り、泥水を流し、樹木伐採を続けては、仮に流量だけ維持されたとしても、河川生態系は大きな影響を受けるでしょう。また河道掘削によって日常的な水位が下がれば、河川流量は変わらずともポンプアップは困難になります。かつ河川水位の低下によって地下水も下がるため、生活用水、農業用水に井戸水を利用しているところでは、取水がかえって困難になる恐れがあります。</p> <p>また、河道掘削によって岩盤まで掘り込んだ場合、洗掘による急激な河床低下を発生し、新たな災害を引き起こす場合があります。</p>

No.

メールでの意見

【参考写真】(ビデオ映像より)



(写真 2-1) 沙流川下流域では数十羽のオオワシ、オジロワシが見られ、越冬地として重要である。大規模な河道掘削工事が、沙流川の河川生態系に大きな打撃を与えることは必至。  
(2005. 11. 27 紫雲古津)



(写真 2-2) サケをつかまえたオオワシの若鳥(2005. 12. 8 紫雲古津)

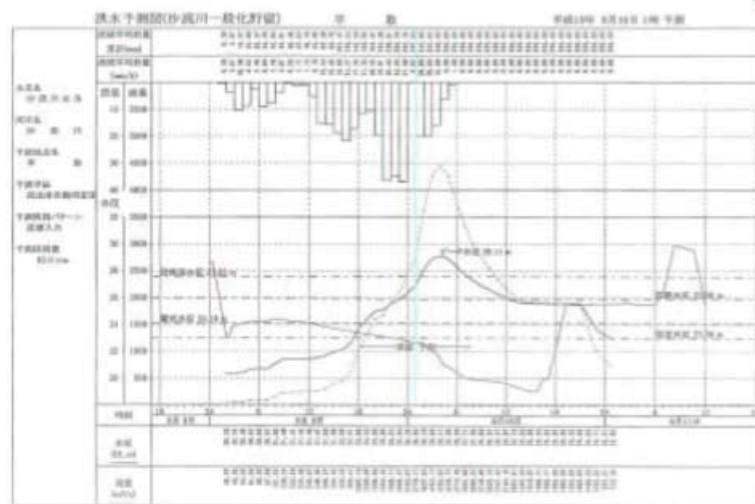
8

## 2-2. 2003 洪水・平取地点の水位と流量

今度は、沙流川の「治水基準点」とされている平取水位観測所における、2003年8月洪水時の水位と流量を見てみましょう。

### (1) 予測より大幅に低かった平取の水位

洪水の間、二風谷ダム管理所では、1時間毎に今後のダムと下流の水位・流量の予測を行っていました。2003年8月10日午前1時に行われた予測では、平取の水位流量のピークは午前4時頃の4,450m<sup>3</sup>/s、最高水位29.11mになるという数値が算出されていました。



(図2-4) 二風谷ダム管理所で洪水当日に作成された水位予測図

午前1時の予測では、平取の流量のピークは午前4時頃の4,450m<sup>3</sup>/s、最高水位29.11mになるという数値が算出された。

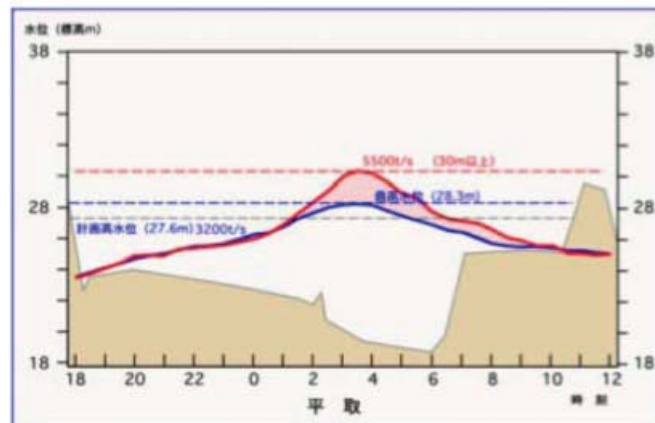


二風谷ダムの放流量は、ほぼそのまま平取に到達すると考えられます。そして、ダムから安全に放流してよい放流量は、サーチャージ水位48m時に3,850m<sup>3</sup>/sとされており（※）、この予測は、それを上回る放流を行う「ただし書き操作」に入ることが確実となったことを示します。

二風谷ダム管理所からの連絡を受け、ダム下流の平取町、門別町では、「二風谷ダム決壊のおそれ」、「堤防決壊のおそれ」として、午前2時前後に避難勧告が発令されました。

※H14整備計画による「平取の計画高水流量は3,200m<sup>3</sup>/s」という内容は、洪水当日の二風谷ダムの操作計画には反映されていませんでした。

二風谷ダムの放流量は、午前1時の予測をはるかに上回る5,500m<sup>3</sup>/sにのぼりました（発表値）。ダムから5,500m<sup>3</sup>/sの放流があった場合、平取の水位は、堤防天端を越える標高30mにまで上がるはずでした。しかし、予測よりもはるかに上回る放流を行ったにもかかわらず、平取の最高水位は約28.3mまでしか上がらず、堤防の越流や決壊を辛くも逃れることができました。

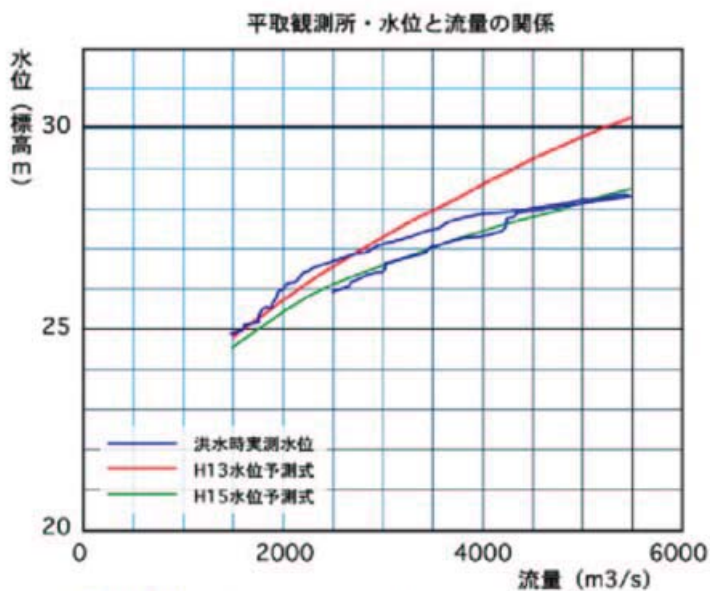


（図2-5）予測より大幅に低かった平取観測所の水位

赤線は、当日ダムで用いられていた水位予測式（H13 Q-H式）によって予測される平取地点の水位。青線は、実際の平取の水位変化。ただし書き操作に入った後の水位が、予測式よりもはるかに低く推移したため、ダムの大量放流にもかかわらず、平取では奇跡的に堤防決壊を免れた。

No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="437 443 762 470"><b>(2) 水位予測が大きく外れた理由</b></p> <p data-bbox="424 515 1200 577">平取の水位が、予測値よりもはるかに低く推移した理由は、今となっては特定することができません。いくつかの可能性とその組み合わせによるでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="443 622 1043 649">a. 二風谷ダムがの放流量が、実際には発表値よりも少なかった。</li> <li data-bbox="443 658 715 685">b. 平取地点の予測式の誤差。</li> <li data-bbox="443 694 587 721">c. 河道の変化。</li> <li data-bbox="443 730 740 757">d. 上記の複合的な作用による。</li> </ul> <p data-bbox="424 801 1200 936">c. の河道の変化ですが、侵食により、洪水前後では平取地点の河道断面積（河積）は 50m<sup>2</sup> ほど変化していました。しかし流速を仮に 3m/s とすると、流量に与える誤差は 150m<sup>3</sup>/s ほどであり、水位に与える影響は数～十数 cm 程度です。全く影響がないわけではありませんが、ここでは除外してよいでしょう。</p> <p data-bbox="424 981 1200 1075">a. の要因であれば、満水位（サーチャージ水位）を超えた状態でのただし書き操作で、ダムは所定の放流を行えておらず、ダム自身の安全確保に重大な問題が生じていたこととなります。原因はダムへの流木や土砂の堆積でしょうか？</p> <p data-bbox="424 1084 1200 1178">この場合には、次の洪水でも同様の低水位状態になるかどうかはわかりません。本洪水のデータに基づいて河道整備計画を立てることは、河道の流下能力を過剰評価することになり危険です。</p> <p data-bbox="424 1223 1200 1357">b. の要因であれば、ダム建設等の治水計画の根拠となる平取の水位流量のデータに、重大な誤りがあったこととなります。現在の計画高水位である 27.55m で 4,000m<sup>3</sup>/s の流下能力があるならば、H14 整備計画を議論する際の前提条件に大きな誤りがあったということです。</p> <p data-bbox="424 1366 1200 1429">この誤りがなかった場合、「二風谷ダム単独案」がとおり、平取ダム建設は廃案になっていた可能性もあるでしょう。</p>

## 【参考】平取地点の水位と流量の関係



洪水時実測水位は、二風谷ダム放流量（発表値）に対する30分後の平取の水位。  
 H13水位予測式は、平成13年のデータに基づいて作成された予測式。2003洪水中の水位予測に使用されたもの。洪水後の「ダムの効果は1m」という発表もこの式による。  
 H15水位予測式は、2003年洪水時のデータに基づいて後に作成されたもの。

（図2-6）各水位予測式（水位流量曲線：H-Q式）と洪水当日の平取の水位変化

H14整備計画、また洪水当日の水位予測は、H13年式（赤）ないし同等の計算式で行われた。しかし洪水時の水位（青）はこれより大幅に低く推移し、平取では堤防の越流、決壊を免れることができた。洪水時の水位変化に、ダム放流量（最大5500m<sup>3</sup>/s）との乖離が大きかったことから、ダム放流量5500m<sup>3</sup>/sの際の平取の流量が5200m<sup>3</sup>/sになるとして、H15式（緑）が新たに作成された。

No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="422 443 683 474"><b>2-3. 議論の前提の変化</b></p> <p data-bbox="422 517 1200 613">以上見てきたように、今回の変更案では、従来の流域委員会の「結論」のみを踏襲しているものの、その結論に至った議論の根拠や過程の大部分は、ことごとく覆っていることがわかります。</p> <p data-bbox="422 624 1200 792">議論の前提となる事実が大きく変化しているにもかかわらず、過去の議論の「結論」にのみとられるのでは、本変更案に述べられている、「社会経済状況の変化や新たな知見・技術の進歩等により適時見直しを行うものとする」という一文にも反しますし、なにより環境保全も安全な治水対策も、何百億円かけても実現不可能です。</p> <p data-bbox="422 801 1200 898">「大洪水を受けて何もするな」といっているわけではありません。新たな知見、さまざまな状況変化をふまえて、「根本から計画全体をていねいに見直すこと」が一番必要なのではないでしょうか。</p>



### 3. ダム計画の問題

#### 3-1. 二風谷ダム



(写真 3-1) 二風谷ダム堤体付近 (2005. 9. 12)

表 2-1-2 沙流川総合開発事業

項目	内容	項目	二風谷ダム	平取ダム
開発目的	平均貯 ・洪水調節 ・流水の正常な機能の維持 ・利水の補給と供給 ・発電	集水面積	1,215 ㎍	234 ㎍
		湛水面積	4.3 ㎍	3.1 ㎍
		堤 高	32.0 m	56.5 m
		堤 長	550.0 m	600.0 m
		総貯水容量	31,300,000㎍	45,800,000㎍

(図 3-1) 沙流川のダム計画の概要

既設の二風谷ダム、計画中の平取ダムの規模には変更がありません。変更案は、ダム内部の容量配分を変更するというものです。

(沙流川水系流域委員会・第2期第1回 配付資料より)

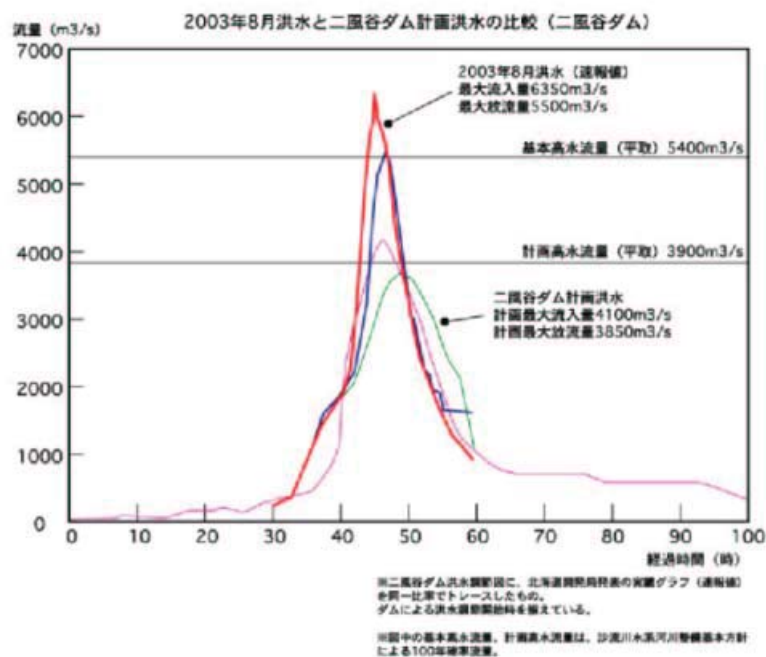
#### (1) 二風谷ダムの構造

二風谷ダム、平取ダムは、苫小牧東部工業用水の利水計画による取水施設として、1971年(S46)に計画されたものです。とくに二風谷ダムは、大規模な取水堰に、わずかばかりの発電施設と治水機能を付加することで、「多目的ダム」としての体裁を整えています。

No.	メールでの意見
8	<p>設計では、二風谷ダムは、標高 40m 以下を堆砂容量 (5,500 千 m<sup>3</sup>) として、あらかじめ無効な容量として見込んでいます。その上の、標高 42.5m (夏期) 以下を利水容量 (約 6,200 千 m<sup>3</sup>) として、「ため池」の働きを与えています。そして標高 42.5m から 48m のサーチャージ水位 (洪水時満水位) までが、洪水調節に用いる洪水調節容量 (約 19,800 千 m<sup>3</sup>) です。</p> <p>サーチャージ水位の上の標高 49.4m が設計洪水水位とされ、とくに大きな洪水が発生し、サーチャージ水位を上回る事態になった場合には、サーチャージ水位から設計洪水水位の間の高さを使って、流入量に等しい放流となる操作をします (ただし書き操作)。このとき、ダムは洪水調節機能を放棄します。</p> <p>二風谷ダムに想定される最大の流入量、設計洪水流量は 6,200m<sup>3</sup>/s です。6,200m<sup>3</sup>/s の流入量が長時間続く場合に、設計洪水水位の標高 49.4m で最大放流可能量である 6,200m<sup>3</sup>/s の放流となり、水位が安定するということです。設計洪水というのは、設計上で想定している最大流量です。これより大きな洪水は、ダムの設計では考慮されていません。</p> <p>ダム天端は 51.1m です。これは、設計洪水流量の洪水が流下している際に、風浪や地震が生じて、ダムの上を洪水が越えて溢れないよう、1.5m ほどの余裕高を見込んでいます。</p> <p><b>(2) 現在の二風谷ダムの運用</b></p> <p>2003 年 8 月の洪水当日、二風谷ダムは計画当初に定められた操作規則によって運用されていました。これは、苫小牧東部工業用水の利水計画が存在しているという仮定のもとに、標高 40m を最低水位とし、42.5m (夏期) まで、工業用水と発電用水として、常に水を溜めておきます。そして、42.5m～48m までを用いて洪水調節を行うという運用です。</p> <p>洪水時には、ダム流入量が 1,900m<sup>3</sup>/s になるまでは流入量をそのまま放流して 42.5m の水位を保ちます。そして、1,900m<sup>3</sup>/s を超えた時点から、ダム底部に設置された 7 門のオリフィスゲートを 3.5m の高さにかけて固定し、「自然調節方式」によって洪水調節を開始します。</p> <p>ダムの操作は、あらかじめ想定された「計画洪水」の流量やその変化 (ハイドログラフ) に対して決められており、計画洪水 4,100m<sup>3</sup>/s の最大流入がある</p>

ときに、サーチャージ水位48mに達し、3,850m<sup>3</sup>/sの放流を行うというものです。二風谷ダムによる洪水調節効果は、計画上では250m<sup>3</sup>/sとなります。

なお、サーチャージ水位を上回る干渉のあるときには、ダムは「ただし書き操作」に移行し、3,850m<sup>3</sup>/sを超える放流を、そのときの貯水位に応じて行います。



8

（図3-2）二風谷ダムの計画洪水と、2003年8月洪水（速報値）の比較。

2003年洪水は計画洪水に対して立ち上がりが大きく、ピークも大幅に高かったと見られるが、継続時間が短かった。なお、2003年洪水の最大流入量は、後に約6,100m<sup>3</sup>/sに修正されている。

### （3）H14 河川整備計画による二風谷ダムの運用計画

1997年（H9）の河川法改正に基づいて沙流川水系河川整備基本方針が策定され、この基本方針に基づいて今後20年間程度の沙流川の整備方針を決めるため、沙流川水系流域委員会が組織され、2002年（H14）に、沙流川水系河川整備計画が策定されました。

この新しい河川整備計画では、「二風谷ダム+平取ダム+河道改修（3か所）」案が妥当とされ、平取ダムの建設計画が追認されました。また流域委員会に提示された資料では、「治水対策面で効果的な操作方法は、二風谷ダムで治水容量を大きく確保することです」という一文が付加されました（※）。

工業用水の利水計画は、1998年には計画上でも消滅していることから、利水容量を廃止してそのぶんを洪水調節容量にまわすこととなります。水位40mの最低水位以下を堆砂容量（5,500千m<sup>3</sup>）、従来の利水と洪水調節を合わせた容量が、新たに洪水調節容量（26,000千m<sup>3</sup>）とされました。

※この変更による二風谷ダムの治水能力の変化について、整備計画には記載がありません。流域委員会資料から、H14整備計画による二風谷ダムによる洪水調節流量は、約600m<sup>3</sup>/sと読み取ることができます。



図 2-1-6 二風谷容量配分図

（図 3-3）H14 整備計画における二風谷ダムの容量配分図

（沙流川水系流域委員会・第 2 期第 1 回 配付資料より）

#### (4) 膨大な堆砂の進行

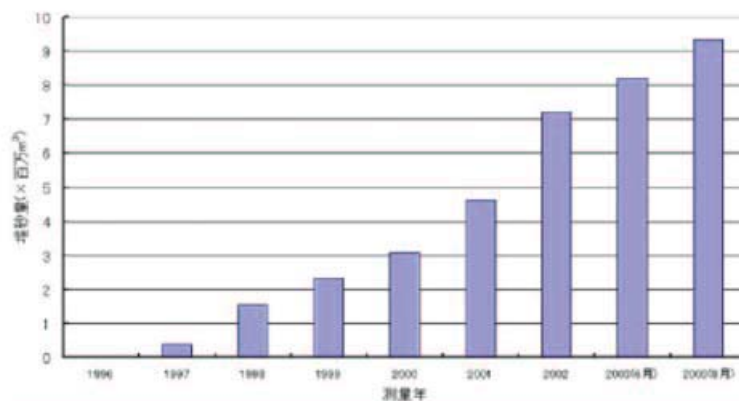
沙流川はその名のとおりに流砂が非常に大きな川で、二風谷ダム建設当時より、専門家から堆砂の問題が強く指摘されていました。この指摘はまったく的中し、完成後5年にして、100年間の堆砂を見込んだ5,500千m<sup>3</sup>の堆砂容量に相当するだけの土砂がダムに溜まりました。

2005年現在の正確な資料は手元にありませんが、それまでの傾向から、10,000千m<sup>3</sup>程度、当初見込まれた堆砂容量の2倍程度の土砂が、二風谷ダムには堆積していると思われます。2004年には土砂の一部を浚渫しましたが、ダム堆砂の全体量から見れば、ごくわずかのものです。

現在、二風谷ダムの底には膨大な土砂とともに膨大な沈木（総量不明）が堆積しています。治水容量にかみこんだ土砂は、ダム湖面の面積を縮小するため、ダムの流量計算にも、数百m<sup>3</sup>/sほどの誤差を与えています。

また、これらの土砂や流木によって、洪水調節主ゲートは半分ほど常時埋もれており、ダム放流量の算定にも、少なからぬ影響が生じているはずです。

1996年からの累加堆砂量(ダムサイト～貯砂ダム間)

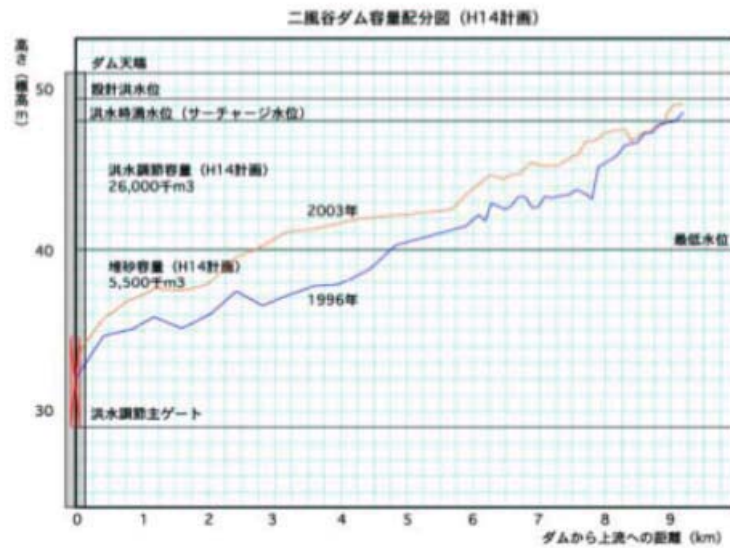


(図3-4) 二風谷ダムの堆砂の進行

ダムの設計で見込まれる堆砂容量は、100年間で5.5百万m<sup>3</sup>とされていた。ダム完成後10年待たずに、その2倍程度まで堆砂が進行している。

(土木学会平成15年台風10号北海道豪雨災害調査団資料より)





8

(図 3-5) H14 整備計画の二風谷ダム容量配分と平均河床の変化  
(土木学会平成 15 年台風 10 号北海道豪雨災害調査団資料に大幅加筆)

#### (5) H17 河川整備計画変更案の二風谷ダム

2005 年 11 月、沙流川水系河川整備基本指針が変更され、これにともなって河川整備計画も変更を受けることになり、沙流川の流域委員会が再開されました。再開された第 1 回の流域委員会では、沙流川全体の整備目標の変更、また二風谷、平取、両ダムの容量配分の変更案が示されています。



図 2-1-6 二風谷ダム貯水池容量配分図

(図 3-6) H17 整備計画案の二風谷ダム容量配分図

(沙流川水系流域委員会・第 2 期第 1 回 配付資料より)

8

変更案では、平取ダムの洪水調節容量が大幅に拡大されたことに対し、二風谷ダムでは堆砂容量が従来の 3 倍近く、14,300m<sup>3</sup>とされています。これは、二風谷ダムで進行する膨大な土砂堆積に対して何ら有効な対策をとらず、ただダムが埋まるにまかせるという現状追認の計画変更案といえます。

この堆砂容量の拡大は、ダムの洪水調節能力にも当然に影響します。二風谷ダムの治水容量は、H14 計画の 25,800 千 m<sup>3</sup> から大きく減少し、17,200 千 m<sup>3</sup> とされました。これにより、二風谷ダムの治水能力が大きく低下することになります(※1)。

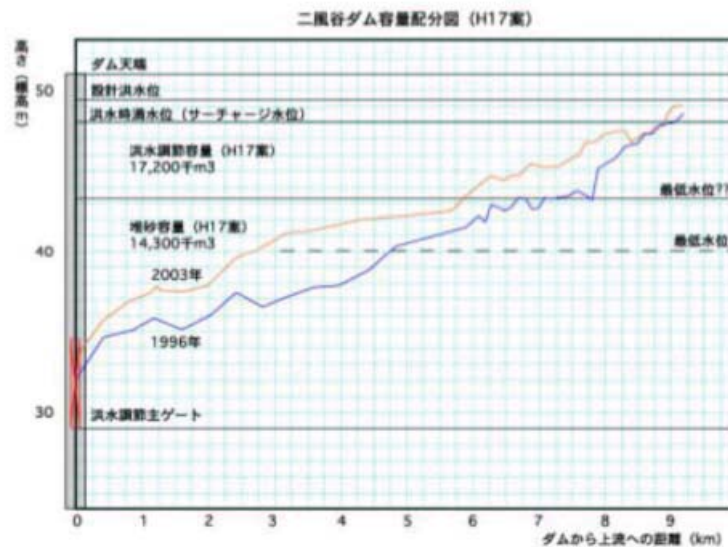
H14 計画では「治水容量を大きく確保する」として、利水容量を廃止し、洪水調節容量にまわしたにもかかわらず、今回の変更案では、従来の利水容量をこえるぶんまでもが堆砂容量とされています。この変更案によると、堆砂容量の上面(最低水位)は、標高 44m 程度になるでしょう(※2)。クレスト放流口よりも高く砂をためる計画案というのは理解しがたいものです。

この変更案は、二風谷ダム全容積の高さにして 2/3、容積にして 1/2 を、土砂と沈木で埋める変更案ということになります。この結果、2005 年夏から行われている「洪水時の事前放流」も、その効果は大きく減少します(もともとあまり効果はありません)。

※1 ダムの洪水調節容量が減少しても、計画洪水の波形が異なることにより、計画数値上での

ピークカット流量が大きく算出される場合があります。しかし、ダム の 治水容量が大きく減少する事実は何も変わりません。2003 年洪水よりも洪水継続時間が長い場合には、たやすく満水となり、「ただし書き操作」に移行せざるをえなくなるでしょう。

※2 最低水位を従来のまま 40m と記している開発局資料には、変更案に記載された堆砂容量変更との整合性がありません。



(図 3-7) H17 整備計画案の二風谷ダム容量配分と平均河床

ダムの高さの 2/3 が堆砂容量とされ、洪水調節容量が大幅に減少した。

(沙流川水系流域委員会・第 2 期第 1 回 配付資料より)

ダムへの膨大な堆砂を容認することで、ゲート周辺への堆砂、堆沈木もさらに進みます。これは洪水調節時の流量算定の誤差をより拡大するでしょう。かつ想定どおりの放流が行えない場合には、ダムの水位が異常上昇することになり、堤頂越流や、また最悪ではダムの決壊に対して、放流操作による回避が不可能になる恐れがあります。

かりに今回の変更案がそのまま認められ、二風谷ダムの堆砂容量を現状の 3

倍にする計画が通ったとしても、新たな堆砂容量でさえ、ダム完成からわずか8年で、その 2/3 はすでに土砂と沈木で埋まっているのです。新たに確保された堆砂容量も、あと 5 年もかからずに全部埋まってしまう、減少される洪水調節容量は、さらに小さくなってしまいます。

この変更案では、過去に 700 億円の費用をかけ、アイヌ民族の聖地をつぶし、違法判決まで受けて建設された二風谷ダムは、「無意味に土砂をためるだけの危険な巨大砂防ダム」にすぎなくなります。治水対策において、現在ある施設の有効利用という観点から、またダム自体の安全性の向上のためにも、「このまま土砂で埋め続ける」のではなく、「堆積した土砂を取り除く」方向が必要なのではないでしょうか。



(写真 3-2) 膨大な流入土砂で埋まりゆく二風谷ダム  
(2005. 9. 12 堤体から約 7km の管理橋より)

### 3-2. 平取ダム建設と変更案の問題



(写真 3-3) 平取ダム堤体計画地 (2004. 8. 25)

2003 年度からのアイヌ文化調査により、チノミシリと呼ばれる、地域のアイヌ民族の重要な信仰の場であることが判明した。また近では、特産の「青トラ石」を利用した縄文時代の石斧生産集落跡も確認されている。

#### (1) 平取ダムとは？

平取ダムは、沙流川総合開発事業計画の一環として、苫東工業基地計画の工業用水取水のために、二風谷ダムとともに 1971 年に計画されました。後、1978 年 (S53) に沙流川水系工事実施基本計画の改定により、両ダムに治水対策目的が付加されています。当初の治水案は、沙流川本流に 2 ダム、支流額平川に 1 ダムの「3 ダム 1 事業」で計画されましたが、本流上流ダムはいつのまにか「立ち消え」になっているようです。

平取ダムは、取水目的として計画・建設された二風谷ダムに対比すると、「普通の」形状のダムであるといえます。しかし、イメージ図等は種々示されてきたものの、具体的にどのようなダムであるのか、具体的にどのような洪水調節を行う計画であるのかは、まったく不明のままです。洪水調節計画が未定のままでは、全体の大枠であるダムの規模などは決めることができないはずですが。





図 2-1-3 平取ダムイメージ図

(写真 3-4) 平取ダム完成イメージ図 (沙流川水系流域委員会・第 2 期第 1 回 配付資料より)

平成 15 年より開催されている平取ダム建設に関わる環境調査委員会では、いくつかの図面が示されています。しかしネット上の資料からは、図面中の数値等を読み取ることはできません。



(図 3-8) 平取ダム下流断面図 (第 1 回平取ダム環境調査検討委員会資料)

ダムの形はわかるが、図中の数値を読み取ることはできない。

## (2) 当初の平取ダム計画

治水目的をもった多目的ダムとしての平取ダムの建設は、1978 年(S53)の沙流川水系工事実施基本計画の改定により、二風谷ダム、本流上流ダムとともに「3ダム 1 事業」として計画されました。この工事実施基本計画による平取ダムの概要は、次のようにされました。

堤高	56.5m
サーチャージ水位	標高 184.3m
最低水位	標高 169m
総貯水量	458,000 千 m <sup>3</sup>
有効貯水量	33,900 千 m <sup>3</sup>

(表 3-1) 平取ダムの概要 (1978 工事実施基本計画改定時)

洪水調節方式	一定率一定量式
洪水調節容量	25,300 千 m <sup>3</sup>
計画最大流入量	2,350m <sup>3</sup> /s
計画最大放流量	900m <sup>3</sup> /s
設計洪水流量	2,650m <sup>3</sup> /s

(表 3-2) 平取ダムの洪水調節 (1978 工事実施基本計画改定時)

平取ダムの目的である、洪水調節方式やその内容、貯水池容量の分配には、さまざまな時点で「見直し」がかけられているようで、この後は確定した内容が示されていませんでした。一方で、ダムの全体枠である堤高、サーチャージ水位、総貯水量は、1978 年の工事実施計画改定時より、一切の変更がありません。

### (3) 沙流川総合開発事業審議委員会での平取ダム

1995 年 (H7) 7 月、建設省河川局長の通達により、建設省直轄、および水資源開発公団のダム・堰事業で、住民の反対や社会状況の変化により長期間、計画が進まなかったものに「ダム審議委員会」を設置し、事業の「透明性」と「客観性」を確保しながら地域の意見を聞くことを意図した、「ダム事業評価システム試行」が開始されます。

沙流川においても、1995-1997 年に沙流川総合開発事業審議委員会 (委員長: 東三朗北大名誉教授・砂防学) が設置され、有識者および地元自治体首長らによって、二風谷ダムおよび平取ダムの今後の扱いについて議論されました。

この審議委員会では、東委員長はじめ有識者全員から、沙流川の膨大な流砂

No.	メールでの意見
8	<p>量やぜい弱な岩質といった沙流川の特徴、また二風谷ダム訴訟の判決を受け、平取ダムに対する慎重論が強く出されました。</p> <p>しかし平取ダム建設を強く望む地元首長らが押し切る形となり、1997年7月の最終答申では、「二風谷ダムについては当初の計画に沿って進め、平取ダムについては事業計画に沿って見直し早期に事業計画を策定すること、今後の沙流川総合開発事業の検討は新河川法の場に委ねる」とされました。また最終答申では、今後の事業実施にあたって、「二風谷ダムのもたらす新知見を参考にして、額平川流域及び沙流川全流域の環境保全に配慮した治水計画を立て、地域住民の意見が反映できるうようにすること」とされました。</p> <p><b>【参考】</b>  平取ダム計画に対する東委員長のコメント  <a href="http://cgi.members.interq.or.jp/www-user/aikei/ainu/hidakashinbun.77.4.html">http://cgi.members.interq.or.jp/www-user/aikei/ainu/hidakashinbun.77.4.html</a>  (日高新聞・「あいかわけいのHP」・「沙流川を守る会」)</p> <p><b>(4) H14 河川整備計画による平取ダム計画</b></p> <p>流域委員会の9回にわたる会合を経て、平取ダムの建設を追認した2002年(H14)河川整備計画においても、ダムの目的別容量が示されました。しかし、「平取ダムにおいてどのような洪水調節を行う計画なのか」は、まったく明らかになりませんでした。</p> <p>委員会の資料中にも平取ダムの計画流量等は一切示されておらず、「一番肝心なこと」をなおざりにしたまま、「開発局の示す建前の断片のみ」で委員会が進められたことがうかがえます。</p> <p>2003年(H15)の6月には、北海道内の自然保護団体等と室蘭開発建設部の間で会合がもたれました。私も同席してこの点について質問しました。しかし、洪水調節方式を自然調節式にするという以外は、「未定であり検討中」という返答しかありませんでした。「未定」では、ダムの建設計画など、最初から立てることができないはずで</p>

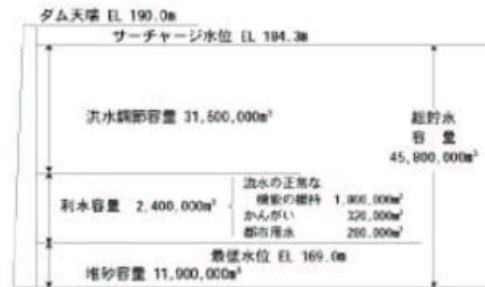


図 2-1-5 平取ダム貯水池容量配分図

(図 3-9) H14 整備計画による平取ダムの容量配分図  
(沙流川水系流域委員会・第 2 期第 1 回 配付資料より)

#### (5) H17 河川整備計画変更案の平取ダム計画

2005 年 12 月に再開された沙流川水系流域委員会では、二風谷ダム同様に、平取ダムについても容量配分の変更が示されました。

8



図 2-1-5 平取ダム貯水池容量配分図

(図 3-10) H17 計画変更案による平取ダムの容量配分図  
(沙流川水系流域委員会・第 2 期第 1 回 配付資料より)

	S53 工事実施計画	H14 整備計画	H17 計画変更案
総貯水量	45,800 千 m <sup>3</sup>	45,800 千 m <sup>3</sup>	45,800 千 m <sup>3</sup>
洪水調節容量	25,300 千 m <sup>3</sup>	31,500 千 m <sup>3</sup>	43,800 千 m <sup>3</sup>
利水容量	8,600 千 m <sup>3</sup>	2,400 千 m <sup>3</sup>	700 千 m <sup>3</sup>
堆砂容量	11,900 千 m <sup>3</sup>	11,600 千 m <sup>3</sup>	1,300 千 m <sup>3</sup>
最低水位	169m	169m	145m

(表 3-3) 平取ダム計画内容の変遷

※H17 変更案の最低水位 145m は、ほとんど現在の河床高と同じ。

H17 変更案では、洪水調節容量が 1.4 倍に増やされた一方、利水申し込みのない利水容量は 1/3 に減少。また堆砂容量は、H14 計画時の 1/10 にまで減少となりました。

	H14 整備計画	H17 計画変更案
合計洪水調節容量	57,500 千 m <sup>3</sup>	61,000 千 m <sup>3</sup>

(表 3-4) 二風谷ダムと平取ダムの合計洪水調節容量の変更

平取ダムの治水容量が大きく増やされたため、二風谷ダムとの合計では、洪水調節容量は 3,500 千 m<sup>3</sup> 増大しています。H17 計画案による 61,000 千 m<sup>3</sup> の治水容量のうち、約 72% が平取ダムによるものです。各々のダムによって、どれだけのピークカット流量が得られるのかは、あいもかわらず一番肝心の資料が提示されていないため不明です。

2ダムによる合計のピークカット流量は、計画洪水 (H17 変更案では H15.8 洪水) に対して 1600m<sup>3</sup>/s になるとされています。ただし、この根拠や各河川、ダムによる配分は不明です。

しかしながら、二風谷ダムの洪水調節容量が大きく減少していることから、沙流川の治水の大部分を、支流額平川に建設が予定される、平取ダムの洪水調節能力に依存する計画であることは間違いありません。

#### (6) 支流ダムである平取ダムの問題

沙流川流域図の水色で示した部分が支流額平川の平取ダム上流域です。沙流



川全体の 18%の面積にあたるこの流域で、流域全体の洪水調節の 70%以上を受け持つことになります。2003 年 8 月洪水では、強い雨域の中心地は、まさにこの平取ダム流域でした。



(図 3-11) 沙流川流域概要図 (河川整備計画資料より)

水色で示した部分が平取ダム流域。沙流川全体の流域面積の 18%に相当する。

8

	流域面積 (比率)	洪水調節容量 (比率)
沙流川流域全体	1,270km <sup>2</sup> (100%)	61,000 千 m <sup>3</sup> (100%)
二風谷ダム流域	1,215km <sup>2</sup> (96%)	17,200 千 m <sup>3</sup> (28%)
平取ダム流域	234km <sup>2</sup> (18%)	43,800 千 m <sup>3</sup> (72%)

(表 3-5) 各ダムの流域面積と洪水調節容量の比較

では、流域全体の 1/5 にすぎない平取ダム流域ではなく、額平川の下流域、あるいは沙流川本流の日高町方面で、強い集中豪雨があった場合にはどうなるでしょうか？ この場合、額平川の平取ダムは、ほとんど洪水調節効果を発揮しません。ダムはダムから上流に降った雨による洪水について、その一部をコントロールできるにすぎないのです。ダムにどれほど大きな空き容量があったとしても、ダム地点で大きな洪水が起きなければ、ダムは何ら効果をもつことはありません。

No.	メールでの意見
8	<p>H14 整備計画においても、「治水面で効果的な操作方法は、下流の二風谷ダムで治水容量を大きく確保すること」とされており、治水のためには本流の二風谷ダムの容積が重要であることを示しています。</p> <p>今回の計画案に応じて平取ダムが建設されたとしても、本流上流域で強い降雨があった場合には、治水容量が堆砂によって大きく減少した二風谷ダムに、大洪水が直接に流入することになり大変危険です。</p> <p>私たちが 2003 年洪水で経験したように、現実の洪水発生の状況は多様です。あらかじめ定められた仮定の「計画洪水」に沿って運用されるダム、とりわけ支流ダムに頼った治水対策では、現実の洪水の多様性に対応できず、想定外の災害を引き起こす場合があります。</p> <p><b>(7) 平取ダム流域の膨大な土砂・流木発生の問題</b></p> <p>2003 年洪水以降（あるいはそれ以前から）、平取ダムが計画されている額平川流域では、膨大な流出土砂と流木の発生が続いています。2005 年秋現在、二風谷ダム上流の沙流川本流は、一時期に比べるとだいぶ濁りもおさまり、青い澄んだ流れを見ることができるようになってきました。しかし、額平川から沙流川、二風谷ダムに流れ込む流れは、相変わらず茶色にあるいは灰白色に濁った「泥水」のままです。泥水には、当然のことながら多量の土砂成分が含まれています。また、2003 年洪水で二風谷ダムに流れ込んだ多量の土砂と流木の発生源は、同じく額平川流域であると考えられます。</p> <p>a. 減少される堆砂容量の問題</p> <p>1978 年（S53）の工事実施基本計画では、額平川流域から発生し、平取ダムに堆積する 100 年間の土砂量を 11,900 千 m<sup>3</sup> と計算し、平取ダムの最低水位を標高 169m としました。</p> <p>ところが H17 変更案では、平取ダムの堆砂容量は初期計画の 1/10 しかない、1,300 千 m<sup>3</sup> にまで減少させられています。計算上、平取ダムの堆砂容量は 10 年ほどで全て埋まってしまい、ダムの機能に問題が生じることになります。</p> <p>現在の二風谷ダムは、標高 40m 以下の 5,500 千 m<sup>3</sup> の堆砂を見込まれています</p>

No.	メールでの意見
8	<p>が、すでにこの 2 倍程度の土砂が堆積しています。二風谷ダムに関する H17 変更案は、この現状をただ追認するものです。</p> <p>ダムへの実際の堆砂は水平に進むわけではなく、ダム貯水池内に傾斜して進行します。また額平川流域の土砂発生量も、台風災害の影響で大きく増大していると考えられます。平取ダムは完成直後より貯水池への堆砂の影響が急激に現れ、ダムの正常な機能が維持できなくなるでしょう。</p> <p>b. 膨大な流木発生の問題</p> <p>2003 年 8 月洪水では、二風谷ダムに 6 万 m<sup>3</sup> 以上の流木が滞留しました。この膨大な流木の流入に、流木対策として貯水池に張り巡らされていたネット（網場）は、まったく無力でした。</p> <p>洪水調節開始後まもなく、多量の流木がネットの下をくぐり抜け、ダム堤体や放流ゲート付近に到達しました。8 月 10 日午前 4 時すぎには、流木の圧力でネットが切断され、切断されたネットに絡んだまま、多量の流木がクレストゲートから一気に放出される事態が生じています。流木の一部はゲート周辺に堆積したまま残り、ダム放流量、流入量の計算にも影響を与えていたと考えられます。</p> <p>流木の影響を受けるのは、ダム上部のクレスト放流部ではありません。ダム下部に設置された洪水調節主ゲート（オリフィスゲート）からも、流木が飛び出していく様子が目撃されています。</p> <p>当時の状況より、ダム貯水池右岸側を流れてきた流木は、その大部分がダム堤体で止められたと考えられます。しかし左岸側を流れてきた流木は、大部分がクレスト放流部から放流されたと考えべきでしょう。事実、二風谷ダムの下流や河口域には多量の流木が確認されています。建設工事の道々紫雲古津大橋の橋脚も、流木による被害を受けました。</p> <p>また、ダム貯水池の湖底にも膨大な沈木の存在が報告されています。このようなことから、二風谷ダムに実際に流入した流木・沈木の総量は、10 万 m<sup>3</sup> を超えている可能性があります。</p> <p>ダム貯水位が洪水調節の限界であるサーチャージ水位を超えた状態で、流木への対抗手段を喪失していた事実、また流木防止ネット自体が多量の流木と絡んだまま放流ゲートに干渉していた事実は、ダムの安全管理の根底に関わる重</p>

大な問題です。



(写真3-5) 膨大な流木とからみ合ったまま、クレストゲート部から流出する流木防止ネット  
(2003洪水・二風谷ダム)

二風谷ダムの放流装置（洪水吐き）は、クレスト越流部が5m×11mの5門、オフィスゲートが6m×8mが7門（2003洪水時は6門を最大開度5.5mで使用）と、非常に大規模なものです。洪水調節当初より左岸クレストゲートから放流を行うため、洪水や流木の流路が、貯水池左岸に確保されていたことも大きな幸いでした。膨大な流木の流入にも関わらず、放流ゲートが完全に埋塞することがなかったのは、二風谷ダムが大規模なゲートを多数備えた、「放流に主眼を置いたダム」であることが幸いしたといえます。

8

では、平取ダムではどうでしょうか。平取ダムの詳細ははまだ明らかではありませんが、構造や運用に1977年の工事実施基本計画と大きな違いがないとするなら、平取ダムは「流入した洪水（あるいは土砂や流木）の大部分をため込むダム」といえます。

平取ダム流域では、今なお山腹崩壊、溪岸崩壊が続いており、膨大な流木が発生し続けています。今後の大洪水では、2003年洪水時よりも、さらに多量の流木が、高密度で発生する可能性があります。平取ダムは二風谷ダムに比較して放流ゲートの規模が小さく、多量の流木が高密度でダムに流入した場合、放流ゲートは簡単に埋塞してしまうでしょう。

ゲートに詰まりや流下障害を生じた場合には、ダムの貯水位に異常な上昇が生じます。サーチャージ水位を越える場合には、ダムの決壊を防ぐために、「ただし書き操作」によって、流入した洪水量の全量を、そのまま放流しなければなりません。

平取ダムのただし書き操作は、サーチャージ水位直前に、ダム上部のクレストゲートを開くことによって行われると考えられます。しかし、このときには

No.

## メールでの意見

すでに湖面は膨大な流木で埋め尽くされています。二風谷ダムのように、湖面に流木の流路は確保されません。

大洪水時に膨大な流木が高密度で平取ダムに流入した場合、平取ダムは想定どおりの放流を行うことができません。堤頂越流や、最悪ではダムの決壊が生じ、下流に大きな被害を与える危険があります。

### 【参考】



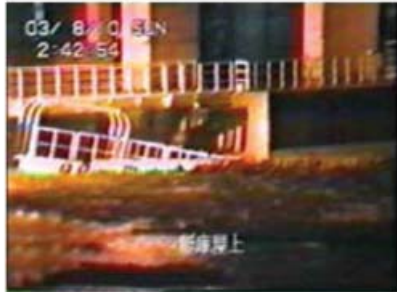
1997年カナダ洪水で決壊した\_The Jonquiere Power Station Damの様子  
コンクリート堤体は無事だったが、周囲の岩盤に侵食を生じ決壊した。

[http://atlas.gc.ca/site/english/maps/environment/naturalhazards/flood\\_power\\_dam.jpg/image\\_view](http://atlas.gc.ca/site/english/maps/environment/naturalhazards/flood_power_dam.jpg/image_view)

8



## 【参考写真】




(写真3-6) 流木とともにクレスト放流部に引っ掛かっていた作業艇の浮枝橋  
(2003 洪水・二風谷ダム)



(写真3-7) 二風谷ダムの湖面から回収された流木の山と、流木防止用ネット (2004. 7. 16)  
流木防止ネットの高さは1.4mしかなく、大きな流木はくぐり抜けてしまう。また水面下の流木には無力。膨大な流木を、このような施設で止めることには無理がある。



(写真3-8) 膨大な土砂と流木の発生が続く平取ダム上流域の様子 (2005. 9. 28 宿主別川)  
河道には多量の流木が堆積し、大雨のたびに移動している。

No.	メールでの意見
8	<div data-bbox="422 452 821 712" data-label="Image"></div> <div data-bbox="422 728 1204 828" data-label="Caption"><p>(写真 3-9) 膨大な土砂と流木の発生が続く平取ダム上流域の様子 (2005. 10. 8 宿主別川) 溪岸崩壊が山腹崩壊を引き起こし、土砂と流木が次々に川に落ちていく。川に落ちた土砂は下流の流れを変え、新たな侵食を引き起こす。</p></div>

No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="422 436 774 465"><b>4. H17 変更案問題の総括と提言</b></p> <p data-bbox="422 506 790 535"><b>4-1. 2003 年 8 月洪水による被害</b></p> <p data-bbox="422 580 1204 745">H17 河川整備計画変更案の主要な目的は、2003 年 8 月洪水への対応であるとされています。この洪水では、想定を超える洪水の流入により、二風谷ダムが治水容量満水となり、ダムの安全確保のため「ただし書き操作」による放流量の増加を行いました。これにより、二風谷ダム下流においても、堤防の設計上の安全限界とされる計画高水位を超えることになりました。</p> <p data-bbox="422 757 1204 853">この状況について、室蘭開建の作成した資料では、「ほぼ全川で計画高水位を超えており、堤防からの漏水も発生するなど、甚大な被害が出てもおかしくない状況」と説明されています。</p> <p data-bbox="422 864 1204 1030">堤防のほぼ天端まで河川水位が上がった場所もあり、堤防からの越流や決壊などが生じなかったのは、何よりも不幸中の幸いでした。また二風谷ダムも、一時はダムの放流可能量（設計洪水流量）を上回る流入量（水位上昇量）が記録されています。この状態が長時間続いたならば、堤頂越流や、それによるダムの決壊が生じるおそれもありました。</p> <p data-bbox="422 1041 1204 1137">しかし、ダムや堤防がほぼ無事で済んだにもかかわらず、二風谷ダム下流域でも、実際には少なからぬ被害が生じています。今後の水害対策のありかたを考えるためにも、まずは、このときの被害状況を具体的に見てみましょう。</p>



(図4-1) 二風谷ダム下流の被害状況

8

a. 平取町ヌタップ地区（紫色）は、堤防整備が遅れており、ほぼ全域が沙流川本川の水をかぶりました。この地域は2001年洪水時にも浸水を生じており、二風谷ダム放流量 1,900m<sup>3</sup>/s 程度でも危険な場所です。この地域も河道掘削等の対象に入っていますが、掘削工事は下流から行うため、20年計画の大規模な河道掘削整備がこの地域に届くのは10年以上も後になります。その間は事実上有効な治水対策が行われず、もっとも危険な地域が、今後長きにわたって放置されることとなります

b. ヌタップ地区向かいの平取町荷葉地区（緑色）は、樋門に流木が挟まったために、樋門が閉じられなかったことによる逆流被害です。樋門に流木に対する備えがあり、樋門を閉じた後に適切な排水作業を行っていたなら、これほどの被害を出さずに済みました。

c. 平取町紫雲古津地区（緑色）は、沙流川本流の水が霞堤の切れ目から堤内に

No.	メールでの意見
8	<p>上がって生じた被害です。連続堤防として樋門を設置し、樋門を閉じた後に適切な排水作業を行っていれば、これほどの被害を出さずに済みました。</p> <p>d. 下流の門別町富川地区（緑色）は、二風谷ダムのただし書き操作に際して樋門操作員を退避させる際、樋門を開放したまま退避させたため、沙流川本流の水が樋門から堤内に逆流したために発生した被害です。退避時に樋門を閉じ、適切な排水作業が行われていたなら、これほどの被害を出さずに済みました（札幌地裁で係争中）。</p> <p>e. 河口の門別町栄町地区（青色）は、早い時間から樋門を閉じたために支流の水が溢れて生じた内水氾濫です。樋門を閉じたことで本流から支流が切り離され、被害が比較的少なく済みました。しかし、樋門を閉じた後に排水作業が全く行われなかったため、床上・床下浸水の被害となりました。樋門を閉じた後、適切なポンプアップが行われていれば、このような被害は出なかったはずですが。</p> <p>以上のように、二風谷ダム下流域で実際に発生した被害は、ほぼ全てが河川管理の問題であり、当日あるいは事前に適切な対応を行っていたならば、回避あるいは大幅に低減が可能だった「人災」的側面が強いものです。</p> <p>二風谷ダムからの放流量は5,500m<sup>3</sup>/s（発表値）と、河川計画上の安全な値をはるかに上回るものになりました。見込み違いとはいえ、下流堤防がそれに耐えることができたことも、重視すべき実績といえるでしょう。</p> <p>※沙流川水系整備計画変更案では、2003年8月洪水における沙流川水系での死者を3名と記載しています。このうち2名は日高町における車両転落事故によるもので（死者1、不明1）、今回の変更案とは無関係です。また残りの死者1名については、当方では把握できていません。</p>



No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="422 443 986 474"><b>4-2. 従来の河川整備計画及び今回の変更案の問題</b></p> <p data-bbox="435 551 764 580"><b>(1) 不十分、不適切な情報と議論</b></p> <p data-bbox="422 622 1200 754">『2. 河川計画の問題』、『3. ダム計画の問題』で見てきたように、H14 河川整備計画策定にかかわる流域委員会の議論を含めて、河川計画やダム計画に関する第三者的判断に必要な、ダムの運用計画に関する基本的な情報がほとんど示されていません。</p> <p data-bbox="422 763 1200 862">貯水によって洪水調節を行うダムは、同じ雨量、同じピーク流量であっても、洪水波形等によってその効果が著大きく変わってきます。1つの計画値のみでは、ダムの効果や問題について、十分な議論を行うことができません。</p> <p data-bbox="422 871 1200 931">また 2003 年洪水に関する二風谷ダムの効果の発表、また今回の基本方針の変更、整備計画の変更案についても、不適切な数値の扱いが散見されます。</p> <p data-bbox="435 1010 676 1039"><b>(2) 数多くの見込み違い</b></p> <p data-bbox="422 1081 1200 1180">今まで見てきたように、二風谷ダム、平取ダムの建設を柱とする沙流川の治水計画においては、1978 年の初期計画策定以来、数々の「見込み違い」が生じています。</p> <p data-bbox="422 1189 1200 1393">苫東工業用水計画の消滅、アイヌ地権者による訴訟と違法判決、治水計画を上回る洪水、膨大な堆砂と流木の発生、ダム放流量と河道の実測水位の乖離、環境調査のやり直しによる平取ダム予定地の希少生物種の確認、アイヌ文化調査による平取ダム予定地の民族文化伝承における重要性、埋蔵文化財調査による石斧生産拠点集落跡の発見、平取ダム建設費の 6 倍以上の増額、二風谷ダム魚道整備やシシャモ人工産卵床造成の失敗、等々です。</p> <p data-bbox="422 1402 1200 1462">これらの「見込み違い」の大部分は、H14 の河川整備計画の議論の前提とされた事実を、根底から覆すものとなっています。</p>


No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="437 405 721 432"><b>(3) 盲目的な河川整備計画案</b></p> <p data-bbox="424 477 1201 680">今回の計画変更案では、単に「従来の方針を踏襲する」とされ、平取ダムの建設と、より大規模な河川工事を、盲目的に進めることが述べられているだけです。幾多の見込み違いに対する認識、具体的な解決策は、ほとんど何も示されていません。これでは二風谷ダム裁判の違法判断と、同じ誤りを繰り返すことになります。仮にどのような調査を行っても、それが計画に具体的に考慮反映されないのでは、そもそも調査の意味がありません。</p> <p data-bbox="424 689 1201 893">解決が示されないばかりか、たとえば問題が明らかになったダムの堆砂に関しては、二風谷ダムではそのまま埋め続けることとして、現状の前に対策を放棄する一方、平取ダムに関しては堆砂がほとんど生じない前提とするなど、ダム計画相互においても重大な矛盾を生じています。今後の流域の安全に関わる重大な問題でさえ、今変更案では「見ないふり」であるかのように放置されたままです。</p>

No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="422 448 805 481"><b>4-3. 流域委員会のあり方について</b></p> <p data-bbox="422 526 1204 728">改正河川法における流域委員会は、治水のみの委員会ではなく、今後の河川整備のありかた、河川と人間生活の関わりを、総合的に考える場であるといえるでしょう。沙流川の治水、産業、自然、文化等の諸問題はきわめて複雑であり、かつ相互に影響しあっています。開発局が選任した各分野より一名ずつの委員構成では、議論不足となることが、H14 整備計画策定における議論からも明らかです。</p> <p data-bbox="422 734 1204 835">沙流川水系の流域委員会では、関係各分野ごとの専門部会をつくり、流域委員会は、それらの擦り合わせの場とする必要があるでしょう。また民主的な議論を実現するためには、流域委員や専門委員の公募選出のしくみも不可欠です。</p> <p data-bbox="422 842 1204 943">このような流域委員会の運営は、近畿の淀川水系流域委員会においてすでに進められており、河川整備に関わる様々な問題に対して、積極的な提言が出されています。</p> <p data-bbox="422 949 1204 1081">河川整備は地域のために行うものです、拙著で盲目的な河川整備が、地域の今後の発展の可能性を妨げるものにならないよう、計画の立案とその実行には、きわめて慎重な姿勢が必要です。</p> <p data-bbox="430 1126 502 1153"><b>【参考】</b></p> <p data-bbox="430 1164 1181 1191">・淀川水系流域委員会のインターネットサイト <a href="http://www.yodoriver.org/">http://www.yodoriver.org/</a></p>

No.	メールでの意見
8	<p data-bbox="422 405 911 434"><b>4-4. 沙流川の河川整備に関する簡単な提言</b></p> <p data-bbox="443 477 1046 506">最後に、沙流川の河川整備に関する簡単な私案を提言します。</p> <p data-bbox="422 548 624 577">a. 二風谷ダムの扱い</p> <p data-bbox="422 584 1201 680">二風谷ダムの水を一度抜き、洪水調節に影響を及ぼす土砂、流木、異物の調査および除去を行う必要があります。また 2003 年洪水時の再現実験を行い、当日のダム放流量、流入量を精査する必要があります。</p> <p data-bbox="422 689 1201 824">この後、河床の浚渫を行い、利水目的のない二風谷ダムは常時は空ダムとして以後の堆砂の進行と河川環境への悪影響の発生を防止し、かつ現行の堆砂容量含む全ての容量を洪水調節容量として、治水能力を向上させる必要があります。</p> <p data-bbox="422 869 644 898">b. 平取ダム計画の扱い</p> <p data-bbox="422 904 1201 1001">平取ダムについては、とくに土砂と流木の流入による重大な悪影響が懸念されます。これに対し全く無策な計画変更案では、洪水時のダムの安全管理に重大な問題があることから、平取ダムの建設を見送りとする必要があります。</p> <p data-bbox="422 1010 1201 1180">イオル構想などによるアイヌ文化の伝承と再興、自然環境や生態系の保全といった、平取町の今後の町づくりのためにも、平取ダムの建設は障害にこそなれ、何ら積極的な関与を得るものではありません。まずは「危険なダム」を造らないこと、かけがえのない地域資源を失わないことが町づくりの基本であると考えられます。</p> <p data-bbox="422 1225 708 1254">c. 二風谷ダム下流の水害対策</p> <p data-bbox="422 1261 1201 1431">まずは早急な治水対策として、堤防の強化かさ上げ、部分的な護岸設置等、とくに危険が大きい箇所に対する早急かつ効力のある手当てを行うことです。それでも間に合わないところには、H14 整備計画で記したように、部分的な河道改修を行うことが必要です。大規模な河道掘削には、様々な弊害が伴ううえに、実際の整備効果が遅れます。</p> <p data-bbox="422 1440 1201 1536">紫雲古津地区の霞堤を連続堤防化し、樋門及び排水ポンプを設置します。霞堤のままとするならば、本川水位上昇時には、付近が実質的に遊水池となるため、補償を制度化する必要があります。</p>

No.	メールでの意見
8	<p>門別町富川地区は中小洪水であっても内水氾濫被害を繰り返しています。堤防の構造や河川管理を見直し、樋門の適切な管理システムを構築することが必要です。市街地の樋門箇所においては、内水位予測システム（ダム水位予測と同様の手法で可能）を構築し、より被害を低減できる樋門操作方法を確立する必要があります。また各樋門各箇所には、能力の十分な排水ポンプを装備する必要があります。</p> <p>計画規模を大幅に上回る洪水においても、壊滅的な被害が発生しないよう、河道からあふれた水流の力を弱める工夫、被害最小化のため、堤防の決められた箇所からあえて水をこぼす（ある意味で「堤防のただし書き操作」）検討等を行う必要があります。人為的に浸水を発生させる場合には、あらかじめ危険箇所からの移転、土盛、補償等を制度化し、非常時の連絡・避難体制を徹底しておく必要があります。</p> <p><b>【参考】</b>  国土交通省河川局  ・『総合的な豪雨災害対策の推進について（提言）』（豪雨災害対策総合政策委員会）  <a href="http://www.mlit.go.jp/river/index/0418gouuteigen.pdf">http://www.mlit.go.jp/river/index/0418gouuteigen.pdf</a></p> <p>・大規模降雨災害対策検討会  『「洪水氾濫時・土砂災害発生時における被害最小化策のあり方」について提言』  <a href="http://www.mlit.go.jp/river/press/200507_12/051222/index.html">http://www.mlit.go.jp/river/press/200507_12/051222/index.html</a></p> <p>「本提言は、これまでの氾濫させないための川の中の対策から、氾濫した場合でも被害の最小化を図るため、都市計画、住宅、公園、道路などの川の外の施策もあわせておこなうことへの施策の転換を求めるものです。」</p> <p>d. 二風谷ダム上流（主として額平川流域）の河川管理と治山・治水対策  流木の発生、洗掘と土砂の生産を抑制するための適切な河川管理が必要です。  下流に不要な侵食を生じ河道を不安定化させる治山ダム、砂防ダムの段階的な撤去を行います。また河畔林の造成と、水衝部への杭打ち、石積み護岸等による河畔林の保護を行います。堤防の計画高水位以上への植林による堤防強化と流木の捕捉。砂防ダム、二風谷ダムに堆積した砂利を、洗浄を行って自然還元型の土嚢に詰め、洗掘発生箇所等に配置し、洗掘と濁りの発生の抑制等に役</p>



No.	メールでの意見
8	<p>立てます。</p> <p>これらの方策の組み合わせによって、防災と自然生態系回復、アイヌ文化復興の積極的な共存をはかることが重要です。また小規模工事を組み合わせる治水治山対策は、公共事業として地元の安定的な雇用確保にもつながります。</p> <p>【参考・他地域での事例写真】</p>  <p>(写真4-1) 自然石を利用した石積み護岸改修の例（大沼公園・宿野辺川）</p> <p>改修直後は石が動き土砂流出も顕著。部分的には決壊も生じた。5年ほどを経て安定し、河畔植生の回復、ウグイやヤツメウナギの産卵が見られるようになった。石の間にはすきまが多く、川へのアクセスには若干の危険がある。</p>



(写真4-2) 切り込みを入れた治山ダムの例（戸切地川上磯ダム上流）

下流の洗掘防止・溪流生態系復元のため、完成したばかりの治山ダムに切り込みを入れた。従来の河道に合わせ、周囲に植樹を行って土砂流出を抑制する。

#### 【追記】ムダの典型・ダムの小規模発電所

二風谷ダム、平取ダムの平均的な発電出力(最大3,000kw、二風谷平均1,800kW)は、各々一般家庭約4,400世帯分に相当します。またこの電力は流域のみで使われるのではなく、北電に売電され、道内に広く分配されます。道内の世帯数は227万世帯ですから、二風谷ダム、平取ダムの発電能力は、道内の一般家庭向け電力に対し、0.2%相当の底上げとなるにすぎません。

一方、ダムの建設や維持のためにも膨大なCO<sub>2</sub>が生じます。これを火力発電に直すと、どれだけの発電量に相当するのでしょうか。ダム自体の環境的悪影響も顕著であり、ダムによる水力発電は、必ずしもクリーンエネルギーと呼べるものではありません。ダムの効果を考えるには、ダムによる便益と、ダムによる損失の、両方を考える必要があります。

二風谷ダム、平取ダムで発電を行わなくても、地域は何も困りません。そのためにダム建設の主目的である治水能力が大幅に低下し、下流の安全が保てないのであれば、それは本末転倒というものです。

下流の安全向上のために、二風谷ダムの水力発電書は撤去し、二風谷ダムは常時は空にしておくべきです。

No.	メールでの意見
8	<p>常時は空として容量を確保し、かつ環境影響を低減する治水専用ダム（流下型ダム、河床部穴あきダム等）は、島根県益田川ダム等で、すでに建設、計画が進められています。</p> <p>【参考】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・島根県益田川ダムホームページ  <a href="http://www.pref.shimane.jp/section/mizube/dam/masudagawa-dam.htm">http://www.pref.shimane.jp/section/mizube/dam/masudagawa-dam.htm</a></li> <li>・河床部穴あきダムに関する報道の一例（京都新聞電子版 2005 年 11 月 10 日）  「環境によいダムなどありえない」  <a href="http://www.kyoto-np.co.jp/article.php?mid=P2005111000051&amp;genre=H1&amp;area=S00">http://www.kyoto-np.co.jp/article.php?mid=P2005111000051&amp;genre=H1&amp;area=S00</a></li> </ul> <p>-</p>

No.	メールでの意見
9	<p>1. 正常流量について シシヤモ産卵床（河口～KP5.5付近）におけるシシヤモ遡上・産卵時期の正常流量についても公開してはいかがでしょうか。</p> <p>2. 水際の保全について 樹木保全の他、水際の植生の保全についてもより具体的な記述を行ってはいかがでしょう。</p> <p>3. 産卵床の保全について 河床材料を保全するために流砂の連続性に配慮する記述を行ってはいかがでしょう。</p> <p>4. その他 河口～上流域までの土砂動態について現状を明らかにし、総合的土砂管理の観点から今後の土砂管理の方針についても考え方を記述して頂きたいと思えます。以上</p>
10	<p>本河川整備計画は、「1.安心、安全な水系の創出とその継続的な利用の必要性」、「2.流域に伝わる貴重な文化の継承と流域が持つ豊かな自然環境の保全の必要性」などの観点で、今後の流域の保全と整備にとって重要な計画であると拝見しました。以下に、防災面と利用・環境面について、私を感じたことを述べさせていただきます。</p> <p>○防災面 近年、局所的な豪雨による災害が起きております。局所的な豪雨は、短時間に大量の水が河川へと集まること、土砂崩壊が発生しやすくなることなどから、防災上極めて危険な事態となります。</p> <p>このように、防災計画では想定しにくい最悪のシナリオについても十分に検討し、ハード・ソフト一体となった河川整備により尊い人命を必ず守って頂きたく存じます。</p> <p>また、このような事態に対しても迅速な対応・復興が図れる土地利用などに配慮した河川整備を行って頂きたく存じます。</p> <p>○環境・利用面 河川整備計画にもありますように、モニタリングが極めて重要であり、良好な河川環境を損なわぬよう継続的なモニタリングを実施し、順応的な河川整備・管理を行って頂きたく存じます。</p> <p>特に、治水面のみならず生態系に与える影響が大きい流域内の土砂管理には配慮が必要と存じます。</p> <p>また、河川から河口、海岸へとつながる一連の土砂の流れに配慮した土砂管理に目を向け、ダム堆積土砂や河道掘削により発生する土砂の有効利用についてもご検討頂きたく存じます。</p>
11	<p>河川整備は有事の際に一朝一夕に出来る事ではありません。 その有事が10年先か、明日かはわかりません。 平穏な時には重要度が低く思われがちですが、災害時が起こった際のリスクは甚大であり、仮に明日起こりえる事態に備え早急にかつ計画的に行うべき事業と考えます。</p>
12	<p>近年公共事業に対して様々な場面で“無駄” “高い”等と耳にしますが、果たして本当にそうでしょうか？ 台風・地震・津波等の天災に対する治水事業、日本を支える農業に対する基盤整備事業、利水事業等国民にとって十分有益な事業は多々あると思えます。 毎年、日本各地で発生する台風による河川氾濫、近年世界的に多発している大地震への備えなどは、民間レベルで対応できる物ではありません。 このような有事に対する備えを長期的・総合的に計画し推進することは必然であり、公共事業の本来の姿であると思えます。 色んな意見があると思いますが、国民の安全・保護を維持・継続する為の公共事業を推進されることを願います。</p>
13	<p>河川整備は人の生活と切り離すことができない必要なものと思えます。依然として計画規模を上回る洪水は多く発生していると思えます。自分の生命、住居、財産があつてこそ日々の生活が送れると思えますので、防止できる被害は事前に対処を行うべきだと思えます。2年前に富川地方を襲った災害は地元の人々に深い傷を残しています。私は直接被害に遭ったわけではありませんが、地元の人々と関わる機会があつたため他人事として考えることはできません。最近の公共事業縮小の動きがあるためか「公共事業＝悪」として見られてしまい、世間の人々はこのような計画の良し悪しの公正な判断ができない状況になっているのではないのでしょうか。人々の生活のために河川整備が行われることを望みます。</p>

No.	メールでの意見
14	<p>実家が室蘭管内の為、沙流川水系の開発にはその推移を興味を持って見守っている所です。  沙流川といえば平成15年の水害では甚大な被害が出たのが記憶に新しい所ですが、人為的なミスによって被害が拡大した事例も見られたとの報道もあり、人による管理には限界があるのかなと思っている所です。  それには従来の構造にとらわれない新構造の水門等（無人で作動する水門等）の積極的な開発、採用が不可欠と思います。  こういった新技術と自然が協調できる方法を推進して頂きたいと思います。</p>
15	<p>平成15年台風災害の樋門操作で裁判が行われている事は新聞報道等で知っていますが、住民の命や財産を守るために我々の税金が使われる事は大賛成です。今回の様に一度立てた計画が見直され変更されるのは、必要な所に、必要なタイミングで税金を使っているために当然の事と思います  今後も私の様な小さな意見も参考にさせていただき、河川整備を進めていただけるよう、お願いします。</p>
16	<p>近年、局地的な集中豪雨で沙流川流域にお住まいの方はかなりご苦労されていることと思います。  守られるべきは住民の生活であり、そのために必要な治水事業は行われるべきだと思います。</p>
17	<p>沙流川水系におけるダム建設に関してはやはり情報公開の不足という意味において、貴組織の怠慢を批判されても仕方のない状況にあるが、ダム建設に関しては、二風谷ダムと対である平取ダムの早期着工を期待するところである。平成15年の台風被害は二風谷ダムにより軽減されたことは紛れもない事実であり、しかも昨今の異常気象等による局地的な雨量の増大化を考えれば、あの悲惨な災害を二度と繰り返さないためにもダム建設は最早一刻の猶予も無い状況にあるとおもわれる。</p>
18	<p>平成15年8月洪水時に発生した多くの流木は、自分の想像をはるかに超えた自然の脅威を感じました。  森林の持つ治水効果は絶大といわれておりますが、上流域の森林整備育成保全是重要と考えます。  本計画にも示させておりますが、森林管理者等関係機関との連携を強め、具体的な森林整備育成保全の方策を立案した事業展開が進められるよう期待します。</p>
19	<p>河川工事等の計画内容が縷々述べられていますが、この目標達成に必要な期間がおおむね20年間となっている。（14ページ3、計画対象期間）しかし、流域住民はこの計画は、どこから（場所）、いつごろから（期間）等と、もう少し細やかな情報が知りたいと思っているはずで。そこで、例えば、平取ダムや河道掘削、堤防整備等の実施計画を10年後位までの実施予定工程表（バーチャート）を記載することは出来ないでしょうか。  今回の河川整備計画は直轄管理区間のみの計画ですが、前回の洪水時は直轄管理区間外の河川が大打撃を受けたことから、流域住民は管理区間外についても、大に関心があると思われます。区間外河川の整備計画実施機関や出来れば進捗状況等について簡単に記載すべきと思いますが。この整備計画のタイトルは沙流川水系河川整備計画、サブタイトルは沙流川流域の未来へ向けた河川整備計画となっていることから、流域住民は直轄も区間外も区別してないと思います。</p>
20	<p>先日、NHKテレビ『夕張川の治水に生きる』を見て強く思ったことは自然、環境保護は大事な事であるが、人命とそこで生活している人の財産を守る事は国家としての責任である。又、自然環境も開発という人間が手を加えなければ守れない事も多々あるはずで。今後、沙流川水系のみならず、自然との共生といかに効率的、合理的そして更に経済的に将来を見据えた事業として存続する事を強く希望します。</p>



No.	メールでの意見
21	<p>当該河川の洪水のおり影響を受ける皆様に逢っては、洪水時に「命を守る・生活を守る・財産を守る」ため「安心できる河川の形」を切実に望んでいることと推察できます。このことを考慮すると河川整備の早期着工・完成が望ましく、地域の皆様の将来生活設計も成り立つものと考えます。</p> <p>なお、整備計画の纏めに当たっては、河川環境（動植物等生態系・水質等）の保全に留意するとともに新たな潤い空間の創出を願いたい。</p>
22	<p>公共性のある、治水事業は必要であると思います。何事もなければ、よいのですが、最近では実際に、平成15年8月の台風10号のように、洪水が発生し、何事にも替えられない、人命が奪われることがありました。2度と、このような事が無い様に願っていますが、沙流川流域に住む方や、通行される方々のこと考え、河川整備は必要と考えます。</p>
23	<p>沙流川流域にはみどり豊かな田園地帯が開けており、我が町の基幹産業として又住民の憩いの場として重要な地域になっております、近年の異状気象とも思える災害が発生し雨が降るたび怯えて暮らしております、災害当日も平取橋の橋脚に流木が絡み堤防が決壊するのではと思い家族と高い処へ避難して一夜が明けるのを待ちました、安心して暮らせるよう早期の平取ダムの着工及び石狩川のようなスーパー堤防を作り冒頭にも書きましたが今まで以上に住民が川と親しめるように節に希望いたします。</p>
24	<p>太古の時代から我々人間とその祖先、そしてあらゆる動植物が営み続けているのは水であり、これらを生供給して大地を這いずりやがて大海へ注ぐ川は地球上において、無くてはならない大きな役割を担ってきました。これからも永久にその存在は必要です。</p> <p>「水を制するものは国を制す」との言葉は一度や二度耳にしたことがあると思います。災害には地震、火災、暴風等自然災害、人的災害などいろいろありますが、水害は衣食住のすべてに壊滅的な爪あとを残し、その復旧に要する費用と期間は甚大で極まりない損失です。</p> <p>私は、直接沙流川流域に居住するものではありませんが、川に関心ある一人として、本整備計画「変更」（原案）を拝読して個人的な意見を述べさせていただきます。</p> <p>河川整備計画と言えば「治水・利水」だけが主題となっていたが、近年はこれに加え「流水環境の保全」、「河川環境の保全」、「河川親水空間の整備」等あらゆる検討においての整備計画が求められています。</p> <p>本整備変更計画は平成15年の異常気象による、台風10号の洪水、予想もしなかった被災が起因であり、整備の基本方針が明確であり、その内容についても具体策がなされ、計画そのものに特に異論を言うものではありませんが、私見として以下の事項を望みます。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本川流域は農地、牧場が多くこれらの基幹産業の基盤と人命をまもるため、災害から守る、災害に強い整備手法での整備を望みます。 ※被災の甚大さを想定内において、防止するための最大の整備。</li> <li>2. 環境保全、特に水質が安全で安心して利用できる親水空間の整備。 きれいな水で多種多彩の水生动植物が住み、子供が安心して川遊びが出来る水辺の環境。 ※きれいな水が流れる川を保全するには、流域内において家畜のし尿等を河川に流入させないことです。これは地域住民の協力が不可欠であると同時に、河川管理者が実態調査と行うと同時に、モニタリングを実施してこれを維持することが重要です。</li> </ol>
25	<p>15年10号台風の時は、堤防を一杯に流れる沙流川の濁流を見、避難を呼びかけるしか、方法がありませんでした。</p> <p>今回の整備計画変更により、平取ダム、下流の河道整備等にて、より安全で安心出来る、流域環境を、私達の子供、孫の世代に残せるものと期待しております。</p>
26	<p>自分が小学生の35年前には、沙流川・鶴川のような大きな川に近づくことは、許されていませんでした。何故かという、現在のように安全に近寄れる場所もほとんどなく学校の先生からは、「大きな川は、危険なので近寄ってはいけない」と。教えられていたからです。ですから、大きな川は怖い存在だった記憶しかありません。それが近年は、子供たちも安全に近づける場所ができました。子供達にとっては、楽しい川の思い出が残ったと思います。大きな川の利用を、治水制水と同じくらい考えてみたいです。</p>

No.	メールでの意見
27	<p>平取町本町在住の男性です、15年8月の10号台風はかつて経験したことの無い集中豪雨でした。</p> <p>夜中に非難命令が出され安全な場所へ避難しましたが堤防が決壊して大被害になるのではと思いました。</p> <p>今日本だけに限らず世界中が異常気象の影響で何時災害にみまわれるかわかりません。</p> <p>二度とあんな恐ろしい体験はしたくありません、この先沙流川沿線の人々が安心して暮らせますように平取ダムの早期着工と沙流川の安全対策を節にお願いいたします。</p>
28	<p>整備計画変更原案について</p> <p>2005年12月7日に開かれた流域委員会で、室蘭開発建設部（事務局）から出された「整備計画変更原案」は、過去の同委員会で出された考え方を踏襲するという方針のもと作成されています。これについて、委員長に指名された藤間聡氏も、事務局案にのっとり、議論の出発点を「二風谷ダム+平取ダム+河道掘削」に置いています。しかし、変更原案の資料や事務局の説明によると河道掘削は相当大規模工事であり、かつ費用も膨大にふくらんでおり、実質的には全く新しい治水整備計画案というべきものです。</p> <p>現時点における費用対効果の検証、先進的な河川管理の手法の導入、ことに環境配慮の視点などを盛り込み、今一度複数案をもって客観的に比較検討し、影響を受ける流域住民の意思を確かめる機会を設けることを要望します。</p> <p>手続き上の問題について</p> <p>12月17日に行われた門別町における住民からの意見聴取会でも、会場からもう少し丁寧に住民の意見を聞くよう不満の声が上がっていたことを記憶しております。そもそも事業者が住民の意見を聞きたくて開いた説明会であるならば、時間の都合で意見聴取が不可能になるスケジュールを組むべきではないと思います。</p> <p>今後も、議論の進捗に合わせて、その都度住民の意見を丁寧に聞き、委員会における議論に反映させることを要望します。</p> <p>流域委員会の体制について</p> <p>実質的には全く新しい治水計画案が提示されたと認識するとともに、事務局案として、さらに複数の可能性を提示してもらう必要があります。そしてそれらをたたき台として、改めて専門的な立場からの議論を流域委員会として行うべきと考えます。そしてその際、さまざまな分野の専門家や関係者、関係住民を交えた小部会を設置し、各分野の問題点を詳細に検討する必要があります。そのためには事業によって受ける利益と損失を明確にするための専門家による詳細な事前調査が不可欠です。</p> <p>これらの手順をふんで、議論の材料に不備が生じることをのまないよう万全を尽くすことを要望します。</p>
29	<p>意見の要旨</p> <p>①河道掘削の対象となる、二風谷ダム下流の沙流川の堤防内に残された少し高い地面にある森が、沙流川の生態系にとって、どのような意味のあるものなのかを評価した後に、掘削の可否を検討することを望みます。その際、もう一度、引き提案、かさあげ案、遊水池案などの複合的な検討のし直しを望みます。</p> <p>②二風谷ダム湖岸では、水位変動による岩盤露出が見られるが、通常の水位の貯水と事前放流とを繰り返すことで、更に岩盤露出が増える。岩盤露出は、二風谷ダム湖と支流の沢の生物の往来を遮断しており、今回の[変更]（原案）の二風谷ダム運用法では、更に岩盤露出を広げ、支流の水生生物の絶滅につながるの、二風谷ダムは、水位変動のない、常時空ダムにすることを望みます。</p> <p>③子どもたちが沙流川本流や近所の沢で、小魚などを発見できる河川整備の方法を検討して下さい。コンクリートの水路の公園はいりません。</p>

No.	メールでの意見
29	<p>意見</p> <p>宿志別同好会■■■■の■■■■といひます。宿志別同好会は、かつて松浦武四郎がイトウの入る川と記録した「シ・シユクシペツ」（本当の・宿主別川＝宿主別川源流）まで、沙流川河口から徒歩でさかのぼりながら、イトウをはじめ魚たちが川と海を行き来するのに、今の沙流川や額平川や宿主別川の現状はどの程度困難なものか、を実際に目で見てみたい気持ちではじめた会です。平成17年は、16回に分けて、沙流川河口から二風谷ダムを通過して、額平川、宿主別川の入り口まで、全行程を歩き、記録をとりました。会員は全員町内在住者5名です。</p> <p>さて、今回の沙流川水系河川整備計画[変更]（原案）の、大きな2つの骨子についてと、子どもたちへ川を返してほしいとの意見を述べます。</p> <p>まず、二風谷ダム下流の河道掘削の大規模化についてです。2002年版沙流川水系河川整備計画では少しだったものが、今回の[変更]ではかなり大規模に河道掘削が行われると、説明会に参加して説明を聞きました。そして、掘削規模や計画を決定してから、自然環境への影響を考慮するとの説明も受けました。</p> <p>僕達の見たと二風谷ダム下流の沙流川は、不毛な石原が広く広がり、川に枝を落とす柳林はごく少数で、河畔林や湿地もとても少なく、臭い泥に石の色もわからないほど埋まっています。流れは全体に単調で浅く、蛇行や瀬や淵などはあまり見られず、生物の住む川としては既に瀕死の状態に見えます。わずかに残った河畔林やヨシ・オギの群落の多くを削り取ってしまう大規模掘削は、水生生物だけでなく、河畔の生態系に大きなダメージを与えます。これ以上川をいじられる余力を沙流川は持っていないのではないかと思います。また、二風谷ダム下流の沙流川の堤防内には、大小無数の湧水があり、沙流川に新鮮な水を注いでいます。おそらく川底にも多くの湧水があるでしょう。湧水は、川原の下からポコポコ湧いて池になって流れていくタイプもありましたが、大多数は、堤防内のすこし高くなっている森の斜面から湧いていました。その、堤防内の少し高い森を掘削すると、沙流川へ流れ込み、沙流川の底から湧き出ている、魚の繁殖をはじめ水生生物を育む新鮮な水を奪ってしまうことになり、沙流川からは、ますます生物の影が薄らぐと思います。掘削した後がヨシ原などになる保障はありません。インターネットで調べる限りでも、河道掘削の後を復元しようと努力しても、ヨシ原や柳林にならず、荒地にもどってしまった報告を簡単に見つけ出すことが出来ます。</p> <p>二風谷ダム下流の沙流川に残された堤防内の森とその生態系が、沙流川にとってどのような意味のあるものか、その評価を流域委員会は行っていません。削り取ってしまうものが、沙流川の生態系にとって、どのような意味のあるものなのかを評価した後に、掘削の可否を検討することを望みます。その際、河川整備計画の変更内容が、堤防内を大規模に掘削しようとするものであるため、より能力のある治水のためには、もう一度、引き提案、かさあげ案、遊水池案などの複合的な検討のし直しを望みます。</p> <p>次に、二風谷ダム・平取ダムの運用についてです。今回の原案では、二風谷ダムの発電は継続し、洪水が予想される時には事前放流を行い空ダムにするとの説明を、説明会で聞きました。通常は発電水位の水面があり、洪水前は空ダムになり水面は極端に少なくなる計画です。二風谷ダムのダム湖岸は、水位の変動によって斜面が帯状に剥離して岩盤が出ています。二風谷ダムに面した斜面から流れ込む沢は、森の中を流れて来て、この露出した岩盤の上をしばらく流れ、それからダム湖に流れ込みます。この露出した岩盤は5～10メートルの幅があるでしょうか。この岩盤地帯によって、沙流川（二風谷ダム湖）と沢の上流の生物の行き来は遮断されています。</p> <p>この帯状の岩盤露出部分は、水位の変動によって植物が生育できなくなった結果だと思ひます。今回の原案の様な運用を行えば、更に水位・水面の上下幅が大きくなり、水につかたり乾いたり幾度も繰り返されることによって植物の生育ができなくなり、露出する岩盤の幅が更に大きくなり、ダム湖と沢の生物の行き来の遮断は決定的になると思ひます。</p> <p>これを防ぐため、二風谷ダム・平取ダムの発電は中止し、常時空ダムにすることを望みます。二風谷ダム・平取ダムの発電を中止できない場合、小規模な発電施設なので、二風谷ダム・平取ダム内に小さな「ダム内ダム」を作り、発電用の水を確保する施設を作ること提案します。</p>



No.	メールでの意見
29	<p>最後に、子どもたちに川を返してほしいのです。河川整備によって、川は危険な所となり、小学校指定の危険区域ですらあります。</p> <p>知っていますか？子どもたちは水が好きなのを。バケツのなかの水より噴水の水が好き。噴水の水より流れてる水が好き。コンクリートの中を流れる水より、石や砂や草の中を流れる水の中で遊ぶ子どもたちの表情を、ご存知と思います。そして、小魚などの生き物を石や砂や草の中を流れる水の中に発見したときの子どもたちの喜びようや、それを捕まえるためにあらんかぎり創意工夫をする姿をご存知と思います。本流や沢で遊ぶ場所や、本流や沢の生き物の持つ価値は、決してせせらぎ公園や親水公園のような、水浴びしかできない施設で代替することは出来ません。そこへ放しておけば、創意工夫の限りを尽くして遊ぶ川や沢や小魚を、子どもたちに返してほしいと思います。</p>
30	<p>沙流川のほとりに住む主婦です。毎日、沙流川を眺めながら暮しています。2年前の洪水では、二風谷ダムが壊れるという警報を聞き、大変に恐ろしい思いをしました。</p> <p>夜中に長知内橋まで見に行くと、沙流川を帯のように流れていく大量の流木が見えました。岩知志ダムが、ダムにたまった流木を一度に流したのだと思います。二風谷ダムにたまった流木は、大部分が額平川から流れてきたものと聞いていますが、実際には岩知志ダムからも、相当の量が流れてきていたのではないのでしょうか。恐くなって引き返し、今度は二風谷ダムを見に行きました。ダムは無数の流木であふれかえり、流木どうしがぶつかるのか、ダムに流木がぶつかるのか、バーン、ドーンと、ひっきりなしに大きな音が響いていました。流木の山はダムの上の通路まで盛り上がり、いまにもダムを超えそうな様子。</p> <p>「このままでは、本当にダムが壊れるかも。」私は二風谷ダムの信じられない光景を、かたずを飲んで見守るだけでした。あれだけの洪水と流木が入って、二風谷ダムが壊れなかったのは、本当に幸いだったと思います。またダムの放流にもかかわらず、沙流川では堤防の決壊もなく、洪水で亡くなった方がいなかったことも、不幸中の幸いでした。</p> <p>さて、北海道開発局の室蘭開発建設部から、沙流川の整備計画の見直し案が示されています。二風谷ダムに続いて平取ダムを建設し、しかも沙流川の全線を掘削したいということ。でもちょっと待って下さい。二風谷ダムの上にもう一つ平取ダムを建設し、沙流川を20年も30年も毎年のように掘り起こす工事を続けて、私たちは本当に幸せな生活を送ることができるのでしょうか。</p> <p>沙流川河口の門別町からは、平取ダムへの慎重な意見が強く出されているそうですが、私たちの平取町では、平取ダムを建設したくて仕方がないようです。平取町にとって、さらにダムを造るメリットというのは何があるのでしょうか。ダムを造ると、町の財政に交付金があります。お金というものは正しく使ってこそ価値がありますが、ダムを造ってどのような町にしたいのか、平取町には具体的な視点が何も感じられません。また交付金は、地域にリスクがあるから交付されるものです。しかし私たち住民には、そのリスクの中身について何の説明もありません。ただダムを造れ、ダムを造れと繰り返すばかりです。</p> <p>一昨年の洪水で、私たちは人間のできることの限界を知りました。自然の猛威に、人間の力で対抗することにはおのずから限界があります。自然の力には逆らうことはできません。洪水や流木を、ただ力で川やダムに押し込めようとするのではなく、うまく受け流すやり方があっても良いのではないのでしょうか。</p> <p>たとえば川の改修工事にしても、現在のようにコンクリートのパネルを並べるやり方には限界があります。少し大雨が降ると、コンクリートは簡単にめくれ上がって流されていってしまいます。こういうところに、沙流川特産の自然石を使うことができれば、石は多少動いても石ですから、効果が変わることはありません。またもしも石が流されても、人や自然に大きな害を与えることもないでしょう。できるだけ自然のかたちに近付けながら、自然の仕組みにそって災害を防ぐことこそが、大洪水を経験した私たちの選択するべき道だと思えます。</p> <p>沙流川は、シシリムカという古名が示すように、そしてまた現在の川の名が示すとおり、大変に砂の流れが多い川です。この川にダムを造っても、水とともに砂が入り、ダムはすぐに埋まってしまいます。この度の計画変更案でも、二風谷ダムは捨てるつもりなのか、砂への対策もなく、このまま埋めてしまうつものようです。「二風谷ダムが埋まるから平取ダムを造るんだ」というようにも聞こえます。これでは「2ダム1事業」としてきた今までの説明と矛盾しますし、もしも新たに平取ダムを建設しても、やはりすぐに砂で埋まってしまうことでしょう。砂で埋まったダムに、また洪水が起こり、あのような流木が入ってきたら、今度こそダムは本当に壊れ、大災害が発生するのではないのでしょうか。</p> <p>日本は大変な財政難の時代を迎えています。このようなときに、すぐ砂で埋まるダムを造り、かけがえのない沙流川を延々と掘ることに700億円もかけることには、非常に大きな疑問があります。</p>

No.	メールでの意見
30	<p>どちらに転ぶのかわからない大規模な施設整備にばかり頼るのではなく、細かな工夫を積み重ねて被害を最小化すること。これこそが、先の大洪水から、私たちが学んだ生きる知恵だと思います。それは、平取ダム建設と沙流川全線の掘削工事をとりやめることです。地域の人の生活、自然と文化に沿ったかたちで知恵を結集し、有効な災害対策手段、そして地域による地域のための公共事業とされることを切に願います。</p> <p>また、河川管理者の皆さんは、住民を小馬鹿にしたような誠意の感じられない対応、わけのわからない広報活動ばかりを繰り返すのではなく、川にかかわる公務員としてのプロ意識をもっていただき、人と川の関わりのある方をゼロから再構築する位の気構えで、住民、沙流川と関わっていただけたらと思います。</p> <p>住民は何度痛い思いをしても、ただいつまでも、何も知らずに騙され続けているわけではありません。</p> <p>以上、沙流川に暮す住民からの願いです。</p>
31	<p>沙流川に限らず河川、広く言えば山と川と海と空の関連は太古の昔より地球そのものごとく自然の営みであり、最近までは絶妙のバランスが保たれてきました。</p> <p>しかし、最近の全世界的な異常気象や天変地異などによって先人たちの予想をはるかに超える危機が迫っており、今回の事業に山の位置づけを組み入れると、川は山の栄養分を海に運び、海はそれを糧にして人間に生きる栄養をもたらします。</p> <p>また、山は緑のダムであり、人口のダムに対して環境負荷が軽減されます。</p> <p>また、えりも地区では海岸砂丘が何十年もかかって森林管理局と漁協の協力で緑の森林に生まれ変わり、その結果漁獲量が増えているそうです。</p> <p>これらの努力と理念を取り入れ、この事業が沿岸漁民に富をもたらすことになるということに対話し理解していただく。</p> <p>静内・新冠漁協も森林管理局、森林組合、道水産林務部とタイアップし積極的にこの事業に取り組みだしました。</p> <p>堤外地では、流れの妨げになるとの意見から河畔林の取り組みに慎重ですが、魚礁を確保するという観点から住民ボランティアを募り勉強しながら管理してはいかげしょうか。</p> <p>高水敷は地域の基幹産業であるトマト、牛、牧草地などへ開放し、公園として地域コミュニケーションの場としても有効利用が可能だと思います。</p> <p>ハザードマップも道管理河川、町管理河川と情報を共有し円滑な災害管理体制を整備し地域に情報公開を行うようにする。</p>
32	<p>「1.2河川整備の現状と課題」の中で、ピーク流量・計画高水流量・洪水調節流量が、洪水のあった後計画されています。平成17年の計画では、ピーク流量6,600m<sup>3</sup>/s・計画高水流量5,000m<sup>3</sup>/s・洪水調節流量1,600m<sup>3</sup>/sとなっているが、従来の計算手法に近年の異常気象を加味しても良いのではないか。例えば5～10%増しとかすれば、地域住民の治水に対する安心度が増す一方、当然他河川との整合性が取れず、工費も増大するが…。</p>
33	<p>これまでに度々甚大な災害が発生していることから、防災面を重視した計画となることは理解できるが、環境面や利用面に対する配慮が足りないように感じられる。例えば、盛土による堤防や治水の杜の整備において、画一的な断面形ではなく、生態系のエコトーン（移行帯）や堤防の利用を考慮して、平面的・断面的な形状に変化をつけることが考えられる。</p> <p>また、最近では、河川の上流から海岸に至る流砂系の総合的な土砂管理の取り組みも始められており、森・川・海のつながりを重視した環境創出に関する検討も行われている。このような広域的な視点に立った防災や環境保全の考え方を計画に取り込むことも必要ではないでしょうか。</p>



No.	メールでの意見
34	<p>1. 変更案の概要  2005年12月7日に開催された沙流川水系流域委員会において、以下の整備計画変更原案が示された。沙流川水系河川整備に関して、平成11年12月に基本方針、平成14年7月に整備計画がそれぞれ策定されている。しかし、平成15年8月の洪水では整備計画目標流量（4,300m<sup>3</sup>/s）を上回る約6,100m<sup>3</sup>/sの洪水ピーク流量が発生したので、その規模の洪水に対応するため、平成17年11月、国土交通省の河川整備基本方針検討小委員会で基本方針が変更された。それに応じて、今回、流域委員会を再開し、整備計画変更を論議することになった。変更案の具体策は、「現行の河川整備計画の基本的な考え方を踏襲する（二風谷ダムと平取ダムにより最大限洪水調節し、それでも不足する洪水流量を河道で対応する）」ことから、「両ダムの洪水調節効果を最大限活用し、その上で河道掘削の区間、断面を拡大する」としている。具体的な数値としては、平取地点における洪水ピーク流量6,100m<sup>3</sup>/sが見込まれるため、二風谷ダムと平取ダムの貯水によって1,600m<sup>3</sup>/sをカットし、残りの4,500m<sup>3</sup>/sを二風谷ダムから河口までの河道掘削に当てると書かれている。</p> <p>2. 原案自体に関する欠陥  (1) 基本高水流量と整備計画目標流量について  平成17年11月に示された河川整備基本方針では、基本高水のピーク流量を6,600m<sup>3</sup>/sとしており（6頁）、今回の河川整備計画変更原案では目標流量を6,100m<sup>3</sup>/s（16頁）としている。  しかし、これらは、今回の変更原案の根本となるにもかかわらず、その具体的な根拠が原案に示されておりません。この点は、説明責任を回避した点で、大きな問題と考えます。</p> <p>(2) 洪水調節計画流量配分について  前記の目標流量6,100m<sup>3</sup>/sは、洪水調節施設（二風谷ダムと平取ダムの2つのダムと口頭説明）により1,600m<sup>3</sup>/sを調節し、平取基準点では4,500,3/sとするとされている（16頁）。  しかし、同頁の図では、額平川において平取ダムの下流側に1,600m<sup>3</sup>/sが示され、沙流川本流の二風谷ダムでの数値が見あたりません。これは、二風谷ダムの治水能力の変化について原案に記載しない欠陥になり、次項で述べるダムの堆砂容量と洪水調節容量と関連して、大きな問題と考えます。換言するならば、二風谷ダム、平取ダムのいずれも洪水調節計画の基本となる計画最大流入量や計画最大放流量が何ら記されていない点、また平取ダムの設計高水流量も不明な点、いずれも大きな問題であり、それらが具体的に示される必要があります。</p> <p>(3) 堆砂容量と洪水調節容量について  2つのダムにおける貯水池容量配分図（20頁）には、堆砂容量、洪水調節容量などが示されている。二風谷ダムについてみると、堆砂容量が5,500,000m<sup>3</sup>から14,300,000m<sup>3</sup>に2倍以上に増加され、逆に、洪水調節容量は26,000,000m<sup>3</sup>から17,200,000m<sup>3</sup>に急減されている。他方、平取ダムについては、前者が11,900,000m<sup>3</sup>から1,300,000m<sup>3</sup>に激減され、後者が31,500,000m<sup>3</sup>から43,800,000m<sup>3</sup>に多少とも増加されている。これらは、2つのダムの総貯水容量と堤高を変えないままの変更点とされている。流域委員会では、以上の結果、洪水調節容量は3,500,000m<sup>3</sup>増加するとの口頭説明があった。  しかし、平成15年の洪水において二風谷ダムが果たした洪水調節能力とそれに生じた同ダムの堆砂量の実態について科学的に検証することが先決事項であり、そして、膨大な堆砂を浚渫によって除去することが現時点で何よりも必要と思われます。二風谷ダムの現状は、洪水調節ゲートが土砂や流木によって常時半分ほど埋もれており、洪水時の放流にも大きな影響が生じると危惧されます。変更原案では、それらをいっさい説明していないので、大きな問題と考えます。すなわち、二風谷ダムの洪水調節能力について不問にしたまま、今後、平取ダムを建設し、二風谷ダム下流の河道掘削を進める整備計画は、説得力をまったく持ちません。  他方、平成15年洪水を含んで二風谷ダムにおける堆砂量は、完成後5年間で、当初、同ダムで見込まれた100年間分の5,500,000m<sup>3</sup>に相当するものに達しております。沙流川流域において本流と額平川の流水は、通常、後方で濁り水・泥水が発生しておりますので、堆砂の主な供給源は日高山脈最高峰を源流とする額平川流域にあると判断できます。そうした点から、平取ダムの堆砂容量が激減されている点は、まったく説得力を持ちません。  洪水調節容量と堆砂容量は、相互に密接に関連しておりますので、沙流川水系全体の土砂流出の仕組みを押さえた上で、2つのダムの堆砂容量を説明すべきです。</p>

No.	メールでの意見
34	<p>3. 沙流川水系の流域全体における自然環境およびアイヌ文化の保全に関して</p> <p>(1) 河道掘削に関連した自然環境調査について</p> <p>変更原案は、2つのダムによる洪水調節能力を超えた部分を二風谷ダムの下流側における河道掘削で補うとされている。この点は、とりわけ新たな河川工事として、実質的に、自然環境調査を行う必要があると考えます。沙流川水系河川整備に関する環境アセスメントは、河川法が改定される以前のものが基本となっており、現状の自然環境を把握したものではありません。とくに平成15年の洪水によって二風谷ダムもその上下の流域も著しい変化を示し、そのため、今回の変更原案に至ったのですから、自然環境についても十分な現状調査を行った上で、今回の流域委員会開催に凶るべきであったと判断しております。ちなみに、平取ダム建設に関連した「平取ダム環境調査検討委員会」は、二風谷ダム下流域については、検討対象ではなかったことから、改めて、自然環境の調査が必要であると考えます。</p> <p>12月7日の流域委員会では、「植物については問題ないが、シシヤモの生息は大丈夫か」という主旨の委員発言があったが、それについてすら十分な議論がなされませんでした。今回の変更原案では、改めて、野生動植物を含む流域全体の自然環境の把握が必要と考えます。そこでは、既存の二風谷ダムの魚道について、魚類の回遊・移動に関する効果もまた科学的調査に基づいて説明する必要があります。とくに魚道を使用するサクラマスの回遊については、すでに同ダム上流側で放流実験を行ってしまい魚道検証が困難なのかもしれませんが、十分な科学的説明が必要と考えます。さらに、二風谷ダムの下流で生じている河床低下の実態についても、シシヤモ漁業とも関連して科学的に十分に説明する必要があります。</p> <p>これらの自然環境調査に関して、ダム建設後や河道掘削後に行うモニタリングとそれによる対処、あるいはミチゲーションは、河川法でうたわれている自然環境保全の重視と密に関係する事前調査・アセスメントには決してなりません。</p> <p>(2) 平取ダム計画にかかわるアイヌ文化環境保全対策調査について</p> <p>標記は、平取ダム周辺地域のアイヌ文化に関して、「平取町アイヌ文化調査室とアイヌ文化環境保全対策調査委員会」が進め、平成17年3月に平取町から同調査中間報告書が公表され、平成18年3月の総括報告書取りまとめが予定されている。この報告書作成は、平成9年3月に出された二風谷ダム裁判判決文において「アイヌ文化に関するアセスメントがなされていない」という欠陥が指摘されたことを受けたものである。</p> <p>上記の中間報告書では、調査対象地域を平取ダム周辺地域（基本的に平取ダム建設によって水没するエリアならびに堤体管理施設、管理用道路をはじめとした周辺関連施設のエリアを指す）とされている。ただし、調査地域は、基本的には沙流川流域全体を指すとも記述されているが、実際には、前者の平取ダム周辺地域を対象としている。</p> <p>アイヌ文化環境保全対策調査委員会が、平取ダム周辺地域だけを対象としているのであれば、河道掘削が行われる二風谷ダムの下流地域は、二風谷裁判の判断に基づき、アイヌ文化に関する新たな調査対象地域となると考えます。他方、同委員会が沙流川流域全体を対象としているのであれば、流域委員会における河道掘削案の論議そのものが、現在、総括報告書をまとめ中である調査委員会の存在またはそこでの論議を無視するものと考えます。二風谷ダム建設前のアセスメントはもとより、建設後のアイヌ文化ならびにアイヌの人々が受けた影響に関して、事前事後の調査がなされていません。したがって、二風谷ダムとその下流域の河道掘削を含む河川整備計画は、二風谷ダムのみならず沙流川流域全体のアイヌ文化に対する影響調査を十分に行った上で計画立案されるべきと考えます。</p> <p>今回の流域委員会は、上記委員会の進行過程との関連が何ら説明されずに、流域委員会だけを先行させて開催されたことが大きな問題であります。しかも、付言するならば、12月の繁忙期に2回も流域委員会を開催し、年末までにパブリックコメントを求めることは、国民に議論をさせない姑息な方法と感じられ、まことに大きな問題と考えます。</p>



No.	メールでの意見
35	<p>1. 河川法によると、河川整備計画は「当該河川の総合的な管理が確保できるように定められなければならない」とされていますが、沙流川の場合、水系の河川管理において重要な部分を受けもっている北海道庁担当部局も加わった協議がなされるべきかと思われます。流域委員会の見解が示された後に知事意見が参考にされるようですが、原案検討段階の公開的な委員会の場においてもぜひ参加し、住民代表・専門家等と意見交換をする場が必要ではないかと考えます。</p> <p>2. 上記1と同様に、河川整備計画策定過程への、国の森林管理を担当する省庁の直接的な参加が必要だと考えます。平成15年10号台風による災害の教訓の一つは、流出した膨大な流木の状況等から、治水と治山をより一体的に検討し、管理・整備を図るべきということではなかったでしょうか。このことからしても、省庁間での実務的な調整だけではなく、住民代表・専門家等との公開的な協議の場が設けられることを提案いたします。1、2のようにすることは、それぞれの担当分野についての対策立案だけではなく、地域住民への啓発・関心喚起・参画促進という観点からも効果的ではないかと考えます。</p> <p>3. 「沙流川水系河川整備計画」（現行および修正原案双方）の中に「アイヌ文化保存、伝承、振興のための取り組み」が盛り込まれていますが、具体的にどのように進めるのか、沙流川流域全体にわたる総合的な計画が示されるべきではないかと考えます。現在、平取ダム建設に伴う影響検討を旨とする「アイヌ文化環境保全対策調査」が行われていますが、ダムに関連する問題に収斂するのではない、流域全体にわたるあり方を示す実施計画書が「河川整備計画」付属文書のような位置づけで策定されることを要望いたします。</p> <p>以上、平取町の町民として、またアイヌ文化に関わる仕事 [ ] に就いている者として、簡略ですが私見を申し述べました。ご検討くださいますよう、よろしくお願いたします。</p> <p>なお、この意見が流域委員会等、変更計画の策定過程において公開されることを了承いたします。</p> <p>対比表P32の写真タイトルのチブサンケをチナサンケに修正願います。 (平取町HPより)</p>
36	<p>沙流川水系河川整備計画「変更」（原案）にたいして、疑問・問題点を指摘し、計画の見直しを求めます。</p> <p>■【疑問・問題点】</p> <p>●1：原案の3. 河川工事の内容 1) 洪水時の水位低下対策</p> <p>■二風谷ダムと平取ダムによる治水と利水について</p> <p>【目的】の項には「…流水の正常な機能の維持を図る…」とあるが、ダムで砂利流下が阻害されている状況では流水の正常な機能を維持することはできない。流水の掃流力で、特に河床の「湧水帯」及び「伏流水帯」の河床材が洪水時に大幅に消失するため、川岸との落差が広がって河岸崩壊を引き起こし、破堤などの災害につながる。事例：2003年8月台風10号時、二風谷ダム下流の荷葉地区で破堤（川岸の湧水帯の砂利が抜かれて河岸崩壊した）やせせらぎ公園対岸（左岸）の堤防一部崩壊（川岸の湧水帯の砂利が抜かれて大幅に浸食された）があり、河岸崩壊のメカニズムを検証する必要がある。二風谷ダム上流の河岸崩壊のほとんどがダムによる河岸崩壊と見られる。専門家による検証はいずれも視点・意識とも錯誤しており、水害の検証には不備がある。その証拠は二風谷ダムが完成した後、ダムの下流の自然護岸が崩壊し、自然護岸が消失していることから明白である。また、当台風10号で二風谷ダムが示したように、ダムは流下する土砂から粒径を選び分ける「ふるい」の効果があることが明白になった以上、ダムを前提とした治水対策は「流水の正常な機能の維持」が達成されることはない。二風谷ダムでふるい分けられたシルトは下流一帯で河床に沈殿しており、魚類・水生生物の繁殖・生育に必要な透水性が失われている。これはシシャモやサケ・サクラマスなどの水産資源に影響しているばかりか、沿岸海域にも大量のシルトが広がり沈殿し、水産資源への影響は免れない。</p> <p>従って、流水の正常な機能の維持を図るためには正確な検証が必要であり、記載されたような判断には不備と甘さがあるので、さらなる調査と検証の必要性があり、当計画案には賛成できない。</p>

No.	メールでの意見
36	<p>【整備内容】の項では「…2ダムでより有効な洪水調節を行なう…」とあるが、2ダムで流下土砂量が予測を超えて激減するために、2ダム下流の河床材消失の影響は河岸崩壊から破堤につながる災害を発生させる危険性が増すばかりである。専門家の方々はダムの下流を正確に観察し、検証を行なって、「誤り」に気がついて欲しい。当計画案ではここに重大な不備があるため、容認できない。</p> <p>【環境への配慮】の項には昭和57年の環境評価で「…水質、地形、地質、植物、動物、景観について影響は少なく問題はないと評価された…」とあるが、この評価が誤りであることは次の点からも明白であり、再考する必要がある。</p> <p>まず「水質」では、上流の大小のダムにより、河床の粘土層を覆っていた砂利が消失したために、浸食を受けるようになり、シルト状の濁りが消えなくなっている。しかも、二風谷ダムで滞留するために二風谷ダム下流での水質の劣化は改善されることはない。地形については二風谷ダムでは河岸崩壊が連鎖的に発生しており、自然護岸が消失し続けている。また、河床低下による地下水位・伏流水位の低下は二風谷ダム下流で井戸水が涸れたと報告されているように「陸水」全般の視点を持つことが必要である。事例：せせらぎ公園右岸（階段状親水護岸）付近の川岸は2年前までふかふかだったのだが、2005年11月に確認したところ固く締まっている。また、同地点は3年前の厳冬期には川岸の砂礫がむき出しとなっているほどわき水の「ぬもり」があったが、現在では全面的に結氷している。地下水位が下がったためにわき水の水圧が低下し、わき水の突出量が激減していると見られる。従って、当計画案には地下水と地下水位に対する視点が欠落している不備があるので、賛成できない。</p> <p>「地質」では沙流川流域は造山運動の結果、海底堆積層が河床に粘土層となって残っていることから、大幅に浸食され続け、シルトが河川から沿岸にかけて全域に流失を続けている。二風谷ダムはこれを貯留することからその影響は解消し得なくなっている。</p> <p>「植物・動物」については、河岸崩壊に伴う人工護岸により水辺植物が影響を受け、水辺の砂礫のある渚帯が失われ、シルトが堆積することで、浄化菌の効果も萎えていると見られる。また、シシャモやサケやサクラマス等の河床の産卵環境である「わき水帯」や「伏流水帯」が激減し、または失われている。これは河床低下に伴う地下水・伏流水の抜き取り（吸い出し効果）作用と思われるが、地下水位・伏流水位が低下していると見られる。これは魚類・水生生物だけに収まらない人間へも影響する深刻な問題である。事例：シシャモの人工産卵場の造成の失敗やほぼサクラマス天然資源絶滅と見られることから、知見や視点など不備が多く、当計画案は認められない。</p> <p>「景観」については二風谷ダム完成後に下流全域で河床低下に伴う河岸崩壊が連鎖的に発生しており、自然護岸が急速に失われて人工護岸に置き換えられている。河川の当たり前の景観が失われている。本来の自然河川が持つ仕組みが失われ損なわれていることは景観も台無しになっていることであり、国民の財産でもある河川景観をこれ以上失わないで欲しい。従って、当計画案には賛成できない。</p> <p>以上のように、どの項目を取っても影響が現われており、昭和57年の環境影響評価の誤りばかりが際だち、新たな知見・視点に基づき、再環境影響調査を実施すべきであり、当計画案には賛成できない。</p>



No.	メールでの意見
36	<p>● 2：原案の3. 河川工事の内容 1) 洪水時の水位低下対策</p> <p>■ 河道掘削による流下能力の向上について</p> <p>【整備内容】の項では「…河道を掘削する…」とあるが、上流の大小のダム及び二風谷ダムの下流で河床材が大幅に減少し、河床低下と河岸崩壊が繰り返され、災害となっていることからこれ以上の掘削は影響が大きく、止めるべきだ。また、河床低下は地下水位の低下を招いており、将来に取り返しのつかぬ影響を与える。当計画案にはこうした視点が欠落しており、賛成できない。</p> <p>【環境への配慮】の項では「…シシヤモ等の産卵床、生息環境を保全するためかつての沙流川の河川環境に近づけることに努める…」とあるが、地下水位が低下してのではかつての沙流川の河川環境に近づけることはできようもない。根本的な知見の欠落であり、驚くばかりである。こうした異常な判断で川を壊さないで欲しい。シシヤモの産卵場造成に失敗した反省も理由すらも見えてこない。河岸の水辺植物すら河岸が崩壊するために維持できないでいる。ダムの影響が全国各地で発生していることから、まずはそれらを正常な視点で検証することから始めるべきではないのか。別の方法を論議するべきである。貴局の誤った判断に基づく当計画案には反対する。</p> <p>【整備効果】の項では「…洪水を計画高水位以下で流すことができる…」とあるが、河岸崩壊や破堤を招く恐れがあることが認識されていない。掘削整備はダムによる河床低下に更に拍車をかけるばかりで、災害の規模も災害箇所も拡大の一途をたどることになる。再考するべきである。従って、当計画案には反対である。</p> <p>【実施場所】の項では「…概ね全川実施する…」これは判断の誤りであり、自然河川が実験室の実験水路とは違うことすら認識されていない。水が流れる仕組みを根底から変える取り返しのつかぬ愚行である。まずは全国の河川の実態調査を行い、誤りに早く気がついて欲しい。当計画案には反対する。</p> <p>以上のことから、沙流川の治水策は堤防のかさ上げと内水氾濫対策用のポンプ場設備と、遊水池場所を検討して洪水時の流量調整を行なう方向で、もっともっと論議し検討されることを望みます。全国のダム下流で起きている水害についても因果関係を検証し、当計画案を見直し、検討されることを再度付け加えて、当計画案の疑問・問題点を指摘し、当計画案には反対します。</p>
37	<p>整備計画自体は良いのではないかと思うが、「地域と一体となって」や「アイヌ文化保全」は計画の中に入れようが入れまいが、整備との両建ては無理のような気がする。地域も災害を受けているし、アイヌは居住地をなくしているし、どんな計画も反対されれば計画も進まないだろうと思う。計画の中に「地域と一体となって」「アイヌ文化保全」は入れないで、別ものとして進めた方が良く思う。何かと環境問題が取りざたされるので計画に盛り込むことによって、環境に配慮している姿勢を示さないとならないというのはあるが、工事をする以上、壊されない環境もありえないし、いくら環境保全とうたっていても、後から取って付けたような感じは拭えない。</p> <p>災害が起こった場合の計り知れないものがあるが、財政難でもあるし、歳出は控えた方が良くとも思う。例え工事をしても、費用対コストは目に見えてすぐにわかるものでもないし、工事の途中で反対運動にでもあって工事が中断してはまた費用がかかるだろう。周辺の地域も人口の減少が止まりそうもないし、整備をしてもイベント以外では人の集まるようなところでもなさそうなので、危険の多い箇所の住民には移転をしてもらい、計画の規模を縮小するというのはどうだろうか。</p>



No.	メールでの意見
38	<p>平取ダム環境調査検討委員会、アイヌ文化環境保全対策調査委員会の設置およびシシリムカ・イオル文化大学の開設など、沙流川流域の自然環境および地域文化へのご配慮に感謝申し上げます。 標記について以下に意見を述べます。</p> <p>1. 流域の文化への配慮について 自然に畏敬の念を持ち、自然を大事にし、自然の恵みに感謝し、平和で豊かな生活を実現させてきたのがアイヌ文明である。 それは、豊かな自然とアイヌ文化の高度な知恵と工夫の裏づけがあって成り立っており、自然が破壊されるとアイヌ文明も滅び、自然が回復するとアイヌ文明も復活するという関係にある。 機械文明が自然を略奪的・破壊的に利用し、その結果、自らの文明を破滅させてきた不幸な歴史とは対照的である。 沙流川流域の治水をどうするかは、流域の文化を優先して方針を策定すべきであり、したがって、平取ダム環境調査検討委員会、アイヌ文化環境保全対策調査委員会の最終報告を受けてから再度意見募集すべきである。 大規模な河川環境の改変と自然破壊を伴うダムが「アイヌ文化とは相容れないもの」であることは誰が考えても明白である。</p> <p>2. 計画洪水流量を大きくするほど自然環境の破壊や経済的・社会的負担が増大し、その受忍限度を超えるようになる たとえば、千年に一度の洪水対策では、多くの人々の営みがある「かつての氾濫原」を川に返さなければならなくなる。 「計画洪水流量を大きくするほど安全になる」との考えは、あまりにも短絡的である。 旧建設省の河川審議会では、洪水対策として、ある程度溢れさせる考え方を提案している。これはアイヌ文化の考え方により近いといえる。 古来からの優れた方法を含め、様々な方法が考案されている。</p> <p>3. ダムの欠点・限界を謙虚に受け止めるべきである。 ダムは貴重な緑地帯を大規模に水没させて生態系を壊滅させるばかりでなく、種々の技術的および運用上の欠陥がある。ダム以外にも治水対策がある。 自然な流れが豊かな河川生態系を育てているのであって、ダム放流によって河川生態系を維持しようとするのは本末転倒である。 技術計算が優先する時代は過去のものとなりつつある。土木工学は経験工学であるとの原点に立ち返って(計数分析よりも)事実謙虚でなければならない。</p>
39	<p>まず始めに、情報公開と、このような一般の市民が自由に行政に対して意見を言える機会を持つと言うことは、従来にはない手法であり、大変すばらしいと考えます。 公共事業の効率化が叫ばれている昨今ですが、地域住民を始め、多くの国民が望む形での事業が進められればと思います。 私の意見としては、良好な環境・景観には十分配慮して頂きたいと思います。そのためにも多少事業費が嵩むことについては納得できますので、今後も情報公開をお願いします。 一点、気になることとしましては、河川流域(主に陸域)の連続性や環境の保全には配慮されていると思いますが、河口で区切らずに、沿岸域の有効活用、例えば、積極的な沿岸漁場の創出等、を目的とした河川事業ができると、なお良いと思います。 海、河川と区別するのではなく、大きな物質循環系として環境を捉えた事業を期待します。</p>
40	<p>実際に大きな被害を出していることもあり、住民の心の安定も考えるとすれば、整備には賛成だし、どんどん進めていくべきだと思います。そして必ず問題として出てくる環境への影響などに、どういった対処ができているかが気になる部分です。 沙流川沿川のまちづくりが進むなか、その周囲との連携を大事にし、納得のいく整備を進めていってほしいです。 私が第一に考えているのは、より多くの人々にこれらの事を知ってもらい、環境の保全を意識してもらうことです。そして住民の声をより多く取り入れ、最善の選択をしていくことです。 そのためのアピール方法として、河川とのふれあいの場などを提供し、実際にその身で感じてもらうのは大きな効果があると思います。</p>

No.	メールでの意見
41	<p>最近、河川整備計画の話の中で「多自然型川作り」の用語を良く聞く。川本来の自然の姿を取り戻す、との目的である。しかしその話の前提として、「治水」の条件を満たさなければならない。人命、財産を守るためである。それを満足した上で、次に河川環境などの考慮が必要である。</p> <p>資料中にあるように、「治水」の中で、流下能力向上には河道断面積を確保する必要がある、つまり河床の掘削を行う事である。その際、河岸樹木の維持する事には大いに賛成である。上記の計画案とは別の角度から見て、現河川（河道、低水路）を維持し、高水敷部分にいくつかワンドを作り、「治水」および「環境」の両方を満たす事は可能であろうか？ワンドの効果として、①低流速が維持でき、魚類などに適した環境を創造する、②現河道を維持することによりすでに出来ている瀬および淵を維持する、③洪水時はワンドが沈む様な形になり治水効果を発揮する（河の中で擾乱が起き、生態系がスタート状態に戻る事も期待する）、④樹木多自然の維持が可能、などが考えられる。現河道を維持することにより、シシャモ遡上時などに与えるに影響は、流速などを考慮した場合、少ないであろう。現河床掘削した場合、一番の問題点は河床形態（粒径など）の分布状況がどのように変化するか注意が必要と考えられる。シシャモ産卵に影響が少なくないためである。また、河幅を広げる事により、砂州の移動の考慮も充分必要である、これは護岸維持に影響するためである。この点も踏まえ、河川改修後のモニタリングは必要不可欠であろう。</p> <p>上記は環境に対する意見であるが、その前にまず「治水」ありきの「環境創造」である事は、変わらない。※沙流川でキャンプ、シシャモ祭りなど、沙流川の利用している一人です。利用している一人として整備計画を楽しみにしております。</p>

箇所は個人情報等に該当するため黒塗りしています。